肌を汽車の沿線に曝して居つたのである。速やかに稻作を斷念して次の雜穀の播種をなすべきが理窟であるが、一雨降れば田植をと、一日延しに延して遂に播種の機會すらも失つたのである。このやうにして、南鮮一帶は非常な旱魃に惱んでゐた。更に滿洲を經て歸國の途につく前後に於て、北鮮平壤附近には水害が襲來し、朝鮮地方に於ける食糧自給すら危殆に瀕したのであつて、緊急食糧對策が總督府の頭痛の種であつたやうである。即ち、昨年度に於ては、南方の食糧廻送困難と、朝鮮地方に於ける災害とによつて、日滿支の食糧は例年に比して豐富であつたとはいひ難く、このことが治安に關係し、戰力增强の障碍たらんとしたのであつた。

已に滿洲と北支に於ける問題は直接皇國の問題である。國民は常に國內問題にのみ眼を限定することなく、視野を廣く日滿支に注がなければ、今日の日本の問題を具體的に考へることは出來ないといはなければならない。一家、一隣組、一町內の私利私慾に因る醜き鬪爭を繰返すことなく、大東亞戰爭完遂の雄圖を念頭に置き、東亞の現況を大觀するならば、戰力增强並びに食糧問題が國內的問題として考察した時とは比較にならぬ重大問題であることが理解出來る筈である。

支那に於ける特殊鑛、即ちタングステン、滿俺等は、皇軍の占領地帶たる湖南省、及び南支の各地區に產出せられるのであつて、從來アメリカは、借款の見返り物資として、潤滑油の原料たる中南支の桐油並びにタングステン等を支那より吸收して彼等の戰力を培養しつつあつたが、治安の回復と皇國の指導力の滲透とによつて、之らの戰爭必需物資も逐次わが戰力の强化に役立たしめなければならないのである。昨秋、金華附近の戰鬪が行はれたことは讀者の熟知するところであらうが、金華附近は、支那に於ける螢石の主要產地であつて、一種の資源獲得の作戰であつたとも見られるのである。山東附近に僅かに產出された螢石が、金華周邊の獲得によつて之またわが戰力增强に多大の寄與をなしたことを、皇軍に對して感謝しなければならない。その他、河北に大量に存在する礬土頁岩は、ボーキサイトに代るアルミニューム原料として重要なものであつて、超重點產業たる飛行機工業にとつては、缺くべからざる重要資源である。かくて河北の礬土頁岩を原料とするアルミニューム工業が、滿鮮及び內地の各地に行はれ來つたことは、國民の常識として心得置くべきことであると思ふ。

既に述べたる如くベンガル地帶はイギリスの兵器廠であり、この附近に鐵鑛石、粘結性炭、滿俺等が大量に產出せられ、しかも近代的威容を誇る製鐵、製銅、精機製造工場が數多存在するのである。共榮圈建設の爲には、貧弱な資源の活用といふこと以上に、かうした既存の施設の利用を根本としなければならない。また馬來半島に於ける製鐵事業、比島に於ける製鐵事業も、目下

建設途上にある海南島のそれと共に、共榮圏建設の戰力培養の基地として遠からず活用せらるべきはいふを俟たないであらう。

滿洲に於ては、その豐富なる鑛產資源が着々と開發せられ、鞍山に於ける昭和製鋼その他の施設が次々に建設せられ、それが滿洲國獨得の經營方法によつて活用せられてゐる。先に述べた北鮮に於ける電氣化學工業は、新興ながら無盡藏と稱せられる茂山の鐵鑛資源に依存してゐる。戰時下資源の詳細な數字的な發表がなされて居らず、從つて門外漢たる自分達には、現況の正確な實情を知る由もないが、右に述べた支那の實情から推定して、共榮圏の重化學工業の將來は洋々たるものであるといへよう。恐らく戰局の進展と共に、重化學工業の原料生產地への進出が考慮せられるであらうし、その指導者として工業技術者が各地に進出し、こゝに國家的規模に於ける新しい經營形態が生まれ、この經營形態がやがて國內の經營形態の範をなし、文字通り經營に於ける新秩序の建設の生まれることも豫想し得るところである。

今一つ、從來の日本工業史の立場から重要な問題は纖維工業である。かつてわが國の纖維工業は、わが輸出の大半を占めたのみならず、その優秀なる技術は既にランカシャーを凌駕したのであつた。しかるにその原料たるや、絹絲はとも角として、棉の如きは殆ど印度棉及びアメリカ棉に依存して居り、毛織物の如きは、大半濠洲の羊毛に依存するといふ有樣で、プランテーションを持たざる纖維工業としての弱點を有したのである。目下纖維工業關係工場の重工業への轉換が續々と行はれつつあるけれども、衣料問題は戰爭に就いても重要問題であつて、無制限な重工業への轉換が行はるべきでないのはいふまでもない。大東亞共榮圏の各地の實情を見ても、纖維製品は主として輸入に仰いで居たが、共榮圏建設途上に於て、わが優秀なる纖維工業の共榮圏に占める地位は益ゝ增大するものといはなければならない。

北支の棉花は、輸出品として或は國內纖維資源として戰前既に重要なものであつたが、食糧問題と關聯して河北に於ては目下その配分の問題が重大となりつゝある。卽ち棉作適地は食糧增產の適地である。從つて共榮圏建設の爲にある限度の自給體制を確立すると同時に、日本を中心として共榮圏全體の國土計畫が樹立されなければならない。麥類の產する所何れも棉作適地である。地域的な利害に捉はれて纖維資源問題を解決せんとする時には、必ずそこに思はざる破綻を生ずるのである。

大谷光瑞氏の所見によれば、大東亞共榮圏に於ける棉作適地はいふまでもなく第一には印度であり、第二にはビルマ、第三には佛印の一部、次いで江北地區があるとのことである。江北の建

設に就いては第一章に觸れるところがあつたが、淮河と黃河とを以て隔てられて居るこの揚子江北邊の所謂江北地區は、その面積略〻臺灣に等しく、簡單な疏水工事によつて第一次の開拓が行はれたのみにて、東亞共榮圈に要する棉花の約四分の一を產し、同時に一千萬石の米穀を產することが出來るのである。しかも日本にとつては因緣の地といふべく、目下は重慶の地盤といはれ、或は新四軍跳梁の地區と稱せられて居るが、問題はこの經營に當るわが方の態度と施策如何にあり、之らの問題の解決も、必ずしも遠い將來にあるとは考へられない。江北地帶の日本技術による開發が完遂せられることは、黃河治水問題と同じく大東亞建設の事態が、中國民衆に沁々と實物敎育の形に於て了解せられることを意味するのである。光瑞氏が、上海は東洋のマンチエスタアとなるであらうといはれた意味も、恐らくこのやうな關係をいはれたものであらう。

以上、大東亞共榮圈に於ける戰力增强の問題、並びに農業問題、纖維工業問題の大要を述べたのであるが、これによつてそれらの成否の責任はかかつてわが國にあることが明らかになつたことと思ふ。又その成否は共榮圈建設の戰力問題に影響するところ甚大なることも理解されたことと思ふ。

近時ヨーロッパ各國に對する不當な尊敬の念が一部の識者の間に橫行して居り、東亞農村の衣食住が低劣見るに堪へざるものの如き意見を發表するものがないではないが、東亞共榮圈建設の根本問題はかかつて健全な農村の建設に存することを力說しなければならない。食糧の問題を考へるに當つても、近代の所謂榮養科學必ずしも價値なしとしないけれども、數千年に亙る實驗は、數年數十年の實驗に勝ること遙かに大なることを思はねばならない。現に近代ヨーロッパ式生活がわが國に輸入せられ、それに伴なつて食物の嗜好に至るまでヨーロッパ化し、所謂蛋白性食糧と糖製品が都會生活には缺くべからざるものとなつたのである。しかし輸入杜絕と共に都會生活者の間に著しい體質の變化が齎されたことは、私どもの看過し能はざる重要な問題である。わが國の主食物は米である。米は氣候に左右されること最も大きいといふ危險性はあるけれども、米の常食が國民の持久力の根源になつて居ることは非常に大である。しかも、甘藷、馬鈴薯等を除いては反別の產額は他の雜穀に比して甚だしく大である。したがつて米の耕作を、もし雜穀に代へたとしたならば、到底一億の國民をこの狹隘なる國土に養ひ得ざるものであることに着眼しなければならない。又わが食品の中で從來特に多量に攝取せられたものは大豆を主とする豆類である。豆類の含有する植物性蛋白は、優に動物性蛋白に匹敵し得るものであつて、等量の蛋白の價格は動物性蛋白の價格の四分の一の費用を以て作成し得るのである。軍の食糧關係に從事しつつ

ある或る大佐は、豆の外に最も飼育に簡便なる兎を飼養することによつて、纖維資源と動物性蛋白の補給をすべきであると主張せられて居る。味噌、醤油、豆腐等の形を變へた蛋白の他に、日本人は好んで豆類を食するのであつて、之によつて蛋白が充分に補はれるのである。この他に、菜食を尊ぶ日本に於ては、野菜の常食によつて血液の增加に資すること大なる葉綠素を大量に攝取して居る。海洋に惠まれたわが國は、魚介によつてカルシユーム、蛋白、その他必要なる榮養素を攝取するに極めて便利である。殊に最近遠洋漁業が船舶關係から不可能となり、近海漁業によつて雜魚を食膳に上すことが多くなつたが、これはカルシユームの攝取に非常な貢獻を齎しつつあるといふことである。ドイツが蛋白資源の缺乏を補はんとして、自國の機械製品を大量に滿洲國に輸出し、見返り物資として滿洲特產の大豆を大量に輸入し、この大豆を占領地區內、フランス、ポーランド等に强制的に栽培させつつある。これらの事實によつても、食糧問題を單なるヨーロッパの榮養科學の知識を以て考へることが如何に誤つた結果を招來するものであるかを思はなければならない。

このやうな觀點に立つてこそ、健全農村の建設を樞軸とする共榮圈建設の根本對策は樹立し得るのである。

矢野仁一博士は、近代支那の特質は、支那の傳統的文化が歐米的文化に屈服した歷史であるといはれて居るが、支那の政治、經濟、文化、凡ゆる方面に於て支配的な勢力が近時著しく歐米化したことは、種々の例證を以て說明することが出來るのである。孫文の三民主義の如きもアメリカ民主々義の飜譯的性質をその本質として居り、支那經濟界に雄飛する浙江財閥の如きも、米英の經濟と不離一體の關係にある。支那事變以前、國民主義を標榜した蔣介石政權の如きも、われらの觀念する國民主義とはその根本を異にするのであり、米英依存の文化形態がむしろその根幹をなしてゐるのである。支那の財政の基礎が直接稅に依存することなく、關稅、糖稅、鹽稅の如き間接稅に主體を置き、中でも關稅は、百年に亙つてイギリスの壟斷するまゝに甘んじて居たことは周知の如くである。又各種の政府事業は概ね外國側の借款及び外債によつて計畫乃至は實行せられて居たことは、田村氏の『支那外債史論』、花村氏の『近世支那外交史』等の諸々の研究によつて明らかである。又租界の歷史を見れば、支那の司法權の如きも久しきに亙つて自主的に行使せられることなく、本年に至つて、わが國の援助を得て漸く恢復し得たといふ有樣であつた。學術方面に於ても、圖書館、各種研究機關、學校、社會敎育機關等の主要なるものは全くアメリカの經營に依存するものであつて、明治四十一年、團匪賠償金の返還がこのやうな趨勢を

更に強化したものであることは別の機會に論じたところである。（拙著『思想戰』參照）殊に、軍事的經濟的觀點より、重要なる役割をなすところの鐵道が國營に移されることなく、多年歐米諸國の資本乃至は經營に委ねられて居たことは、少くとも支那の近代國家的機能が總べて歐米的なる力に依存した事實を明示するものである。從つて國民政府の所謂國民主義の如きは、われらの觀念する國民主義とはその意味するところ甚だしく輕輕するものがあるといはなければならない。

しかしながら、一面に於てかやうな政治力或は經濟力の民衆生活に及ぼす影響は極めて間接的であつて、上層の政治は縣に及ばずといふのが支那の歷史を通じて考へられるところである。支那の歷史の變遷は、上層部に於ける變遷の歷史であつて、支那社會の根柢は、やゝ極端な言ひ方をするならば太古の姿を存置して居るものと見られないでもない。支那の政治、經濟、文化を考へるに當つては、このことを充分考慮しなければならない。支那農村に着眼せざる施策は、支那建設の方策たり得ない。無論從來の歐米の政策とても、農村を對象にしないではなかつたけれども、その問題の仕方はむしろ商業地盤を通じてなす農村の徹底的搾取に他ならなかつたのである。農村の正しい又健全な生活を育成强化し、その力の結集によつて政治力を作り、その政治によつて國政を處理運用して行く底のものでなかつたことは、多少とも支那の農村の實體を知るものに取つては、疑念をはさむ餘地のないところである。

支那事變以後の各種の對策を檢討しても、中國の農村の健全なる育成强化を主眼とした施策は甚だ乏しい。上海、北京等大都市の經濟掌握を第一義とする米英的な經濟政策が著しく表面に現はれて居るのに對して、農村の掌握といふ面では今以て本格的な對策が樹立されて居ないやうに思はれる。支那に於ける天井知らずの物價の昂騰は、裏付物資が不足する結果であるとのみ考へられて居るが、裏付物資のつもりで送られる物資が多ければ多いほど物價の昂騰を招來する現象を呈して居る事實を凝視しなくてはならない。これは舊來の歐米的なる金融學說を以てしては到底說明せられざる現象である。しかし、以上述べたやうな中國の現狀を考へ、又政治家の觀念を思ふならば、このやうな現象が誘致せらるゝことはむしろ當然の歸結とさへいひ得るのである。これに對する對策は、中國に於ける官僚の宿弊を肅正し、民の福利を考へざる經濟人に對する徹底的な强壓のみが、一見困難に見える中國のインフレーション問題解決の要點である。

中國共產黨の跳梁の如きも、現代支那にとつては重大なる問題である。共產黨の勢力は年と共に增大するといはれてゐる。中國共產黨勢力の伸長といふことは、共產主義思想の瀰漫、共產主

義理論の廣く大衆の共鳴を贏ち得て居るといふが如き思想上の問題であるよりは、むしろ中國農民層の經濟生活の健全化を彼等が具體的に實現しつつある點にある。即ち、共產主義の具體化が中國共產黨勢力の擴大を齎したのではなく、中國農村に於ける民心把握の具體的施策によつて、共產黨勢力を伸ばし得たのである。南京に還都した國民政府が、從來ともすれば農民の怨嗟の的になり勝ちであつたのも、農民層に對する深い考慮が拂はれず、舊勢力の强化に流れ勝ちの點が多かつたからである。即ち、歐米的なる經濟施策が主流をなし、中國傳統の復興といふことに於て缺くるところがあつたからである。

中華民國の歷史は、國民黨と中國共產黨との抗爭妥協の連續であつたが、中國共產黨は久しい間壓迫せられて居た農民層や苦力層にその地盤を得ると共に、情熱的な學生青年層の支持を得て驚くべき勢力を掌握してきたのである。昭和初年には江西省に瑞金共產黨政府を樹立し、國民黨がこれに對して常に抗爭を續けてゐたが、蔣介石が瑞金の共產黨政府を驅逐するに及び紅軍に守られた共產黨の主腦部は、湖南省、廣西省、貴州省、雲南省、西康省、四川省、甘肅省を、凡ゆる困苦缺乏と戰ひながら長途の移動をなし、昭和十二年、現在の紅都、延安に至つたのである。この比類なき苦鬪が又彼等を鍛錬し、民衆の支持を得、青年の憧憬の的となつて居るのである。

中國共產黨に對する同情者ニム・ウエールス（Nym Wales）の『赤色支那の內幕』（Inside Red China——續西行漫記）やその主人であるエドガー・スノー（Edgar Snow）の『支那に懸かれる紅色の星』（Red Star Over China——西行漫記）などは、彼等の生活態度或は彼等の閱歷を詳細に物語つて居る。彼等は敎育と訓練による指導者の育成に重點を置き、延安には赤色大學、即ち抗日軍政大學を始めとして各種の大學が設置せられて居り、その主要なる課程としては、政治、經濟學、中國及びソ聯の共產黨史、レーニン主義、中國の根本問題、世界政治、辯證法的唯物論をも含めた各科哲學を學課として授けてゐる。また黨員指導の爲には、民衆中で黨の工作に從事する爲の訓練と一部の軍事科學を授けて居るやうである。即ち一般戰術及び戰略の理論と實際、及び特殊な邀擊戰術を修得するのである。延安のみならず各共產地區には之ら敎育機關の分校が設置せられ、そこで養成せられた軍人、政治工作員が、便衣の儘治安地區に潛入し、共產黨地區の形成を目論むのである。黨員が主として農村出身のものである關係から、彼らは農民の心理をよく知り、又農村の慣行を熟知して居るので、工作に當つてもこれらを充分に活用して所期の目的を達成して居る。共產黨の主要人物としては、中國のレーニンと稱せられる毛澤東、軍事方面を擔當する朱德を中心に、相當著名なる鬪士が居る。そしてそれらの大部分は農村出身者であり、毛

澤東の如きは道士であつたと傳へられて居る。中國の農村に於ける思想は、道教を中心とするものであるから、このやうな思想を持つ農村に共產黨を潛入せしめるには、毛澤東がその道の人であつたとするならば、誠に適切な方法を講ずるであらうことは想像に難くない。わが國にも名を知られて居る二、三の人達に就いてその出身を見るに、第八路軍軍事委員會の副首席で、國共兩黨間の仲介者として知られて居る周恩來は、明治三十一年江蘇省淮安の下級官吏の家に生まれ、十三歳の時奉天に移住し、十五歳の時家庭が離散したといはれて居る。共產黨に於ける理論家として有名な洛甫本名張聞天は、明治三十三年江蘇省上海附近南匯の豪農の家に生まれたのである。カルフォルニヤ大學に勉學の後一時四川省で教員となつてゐたが、大正十四年共產黨に加入し、昭和元年から五年に至る間、モスコー大學で勉强した所謂インテリ出身である。毛澤東は明治十九年に湖南省湘潭縣韶山の貧農の家に生まれ、聶榮臻も、明治三十二年、四川省重慶の小農家に生まれたが、佛、露に學び、現在冀察特別區政府の主席として、河北の治安攪亂の巨頭である。第八路軍總司令朱德は、毛澤東と同樣明治十九年、雲南省に生まれ、叔父の養育を受けた不幸な人であつて、紅軍の幾度もの戰ひに訓練せられて今日の地位をかち得たのである。山東方面でゲリラ戰の指導をなしつつある徐向前は、明治三十五年、山西省五臺山の小學校教員の子として生まれ、自らも又小學校の教師をして居たことがある。抗日軍事政治學校の校長である林彪とても決して惠まれた家庭の人ではなかつた。明治四十一年湖北省の黃安に生まれ、父は手藝工場を開き、一方では揚子江の船の會計係をする程度の人である。蔣介石の片腕となつて山西省の第八路軍の前敵總指揮の任に當つて居る彭德懷は、明治三十三年湖南省湘潭縣の富農の家に生まれたけれども、九歳の時家を離れて外地に赴き、徒弟となつて居るのである。卽ち、軍閥、財閥が歐米勢力と提携して多年民衆生活を顧みなかつた中國こそは、共產黨跳梁の溫床であるといふことは、これら共產黨領袖の經歷に徵しても知り得よう。また共產黨克服の鍵は單なる武力による共產黨勦滅戰にあるのではなく、共產黨勢力が覬覦し得ざる健全なる農村の育成强化を措いて他に求め得ないことも明らかであらう。

三、我が對支新政策の樹立

支那近代史を回顧して、政策的に見て一應の成果を擧げ得たと思はれるのは、政治經濟的には英國の少數有能の士を以てする政治經濟の要を握る施策があり、宗教政策としては、カトリック

教會を中心とする中國民衆の民心掌握があり、文化政策としては、アメリカ新教々會の經營にかかる學校を通じてのアメリカニゼイションが注目せられ、農村工作としては中國共產黨の工作が有力であり、生活指導の上にやゝ見るべきは蔣介石の新生活運動であつた。（拙著『傳統に生きる』參照）東亞新秩序の建設は、これらによつてなされた諸々の施策の上に出るものであることを要するので、中國の指導をなさんとするものは、かうした近代史の成果を反省して適切なる指導をなさなければならない。このやうな過去の實情を熟知してこそ、中國新政の指標がうち立てられるのである。

よつて次に、支那事變後の對支政策から、今日の新方針確立に至る經緯を略述して、新中國建設の途上に於けるわが方策の目標を掲げたいと思ふ。

支那事變勃發後、間もなくわが國は不擴大方針を一擲し、重慶政府を相手にせざる旨の宣言をなすと共に、對支方策の原則として、わが國には領土的野心なく、中國の獨立を尊重し、賠償金を要求せざることを聲明し、日支の經濟提携と文化興隆とを圖り、以て東亞の安定を確保せんとしたのである。この頃、支那建設の理念として掲げられたものに、東亞協同體の理論と東亞聯盟論とがあつた。東亞協同體の理論は哲學者達の主として唱へたところであつて、日本の强力な指導下に支那を置くことの妥當ならざることを主張するものであり、日支の關係を互惠平等とし、中國の近代國家としての育成强化に對する哲學的な論據を與へんとするものに他ならなかつた。しかもこの思想は有力な政治力を背景に一時勢力を得たのである。東亞聯盟の理論も之と根本の思想に於ては相通ずるものであり、主として經濟政策の觀點から論議を進めてきたのであるが、これも又有力な政治力を裏付ける理論として重きをなしたのである。このやうな建設の指導方針は中國側には極めて人氣を博したのであるが、當時實際的には、北支は中國の自治自衞を認める段階に到達するに至らず、中支に於ては未だ米英勢力が牢固たる地盤を有して居たのであるから、これらの指導方針は羊頭をかかげて狗肉を賣るの譏りを免れなかつたのみならず、先に述べた如き世界史の流れに沿うて皇國の肇國精神を具現する方向とは相背馳する點があつた。即ち、中國に近代的な獨立國家を作るといふ漠たる考へ方は、時勢に逆行する行き方であるのみならず、近代國家の最も基本的な性格は、自力によつて獨立を贏ち得たことであり、他の國の支援によつて、實力以上の力を賦與せられて、外形的近代國家を作るといふことは、近代國家たるの性格をその根本に於て放棄するものといはなければならない。しかも皇國の指導を否定せんとする共產主義的な思想家にとつては、これはまことに好都合な理論體系であるところから、これら

の指導理念の擔當者の中には、思想傾向に於て如何がはしきものが彼我共に少くなかつたのである。

先に述べた如く、大正年代のわが國の思想界はまことに憂慮すべきものがあつたから、滿洲建國に參加した人達は、新しき滿洲の國生みに當つては、我利々々亡者の如き當時の資本家の進出を忌み嫌ふ心持になつたことは必ずしも無理ではない。その意味に於て、內面的に强力な指導を、眞に皇國の傳統を體認せる人々がなすに於ては、一應皇國の指導の直接的指導を離脫することが却つて皇國の傳統に生きる道であつたかも知れないが、かくの如き行き方はともすれば共產主義的勢力の利用しやすい氣運を釀成すると共に、排日勢力結成にとつても亦好條件を與へるものといつて差支へないのである。このやうな點を憂慮し、昭和十五年の暮に帝國政府は、聯盟思想に基づく支那指導方針に對して反省を促がすが如き閣議決定をなし、對支方策に關する皇國の向かふべきところを指示したのであつた。日華基本條約に對する解釋も、このやうな政府の方針に基づいてなさるべきことが示されたのであるが、四圍の情勢は基本條約に具體化せられた施策が熟するのを甚だしく遲延せしめて居たのである。例へば東亞の禍亂の根元をなす米英勢力は、依然として支那に於ける新秩序建設を妨げてをり、積極的なる經濟攪亂行爲は大なる障碍をなして居た如きがそれである。又一面に於ては、對ソ問題がどのやうに展開するかによつて、皇國の進むべき當面の施策に變化を生ぜざるを得ないといふ浮動性も影響してゐたのである。

しかるに昭和十六年十二月八日、大東亞戰爭が勃發して米英打倒の聖戰の火蓋が切られるに及んで、事態は著しく進展し、一ヶ年の戰績によつて今や世界の大勢は既に決定的となつた。支那に於ける治外法權の撤廢と租界の返還が、必ずしも戰前に憂慮せられて居た如き事態を生ぜざることが明らかとなつたので、本年初頭、これを斷行するに至つたのである。のみならず、幾多の問題を孕みながらも、國民政府の實力は逐次增强し、國內に於ける反對勢力に向かつて戡定の軍を派遣するまでに成長し、進んで米英その他反樞軸國家に對する宣戰の布告までもしたのである。このやうな新しい事態に處する方策が所謂日本の對支新方針であつた。その方針の根本は、支那の問題は一應國民政府の責任に歸し、皇國としては內面的に或は忠言を與へ、或は援助の施策を講ずるといふことになつたのである。從來は、中國側は名目に於ては責任者であるが、實質的な責任は皇國が擔當する形であつた爲に、やゝもすれば、都合よきことは支那側が自己の功績の如くに宣傳し、都合惡しきことは一切日本の責任に轉嫁する傾向があつて、これが指導の要領を甚だしく困難ならしめ、やゝもすれば、支那側は日本の實力をかさにきて私利私慾に趨る傾向があ

つたのである。しかるに、このやうな新方針の根本精神は、必ずしも一般に理解せられたとは考へられず、現に北支に於て新民會日系職員が多數退職したことに對して、種々の批判を生じつつあるのである。對支新政策の發表とそれに基づく政策の實施は時期尚早の感があるとか、日本勢力の支那からの後退である等といふ批判も生じつつある。しかし翻つてこのやうな事態の實現してくる因由を尋ねるならば世界無比の實力を有する皇軍の力を恃んで不當なる利益を貪る者、皇軍の武威の蔭に隱れてわが儘勝手な振舞をなしたものの存在したことを想起せざるを得ない。大御心を奉戴し、萬邦をしてその所を得しめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしむる爲に懸命の努力をしてきたものがなかつた譯では決してないが、戰爭といふ現實を通して、さらでだに排日感情を抱いて居た中國民衆の眼には、惡のみが大きく映じたことは蔽はれぬ事實である。中國共產黨、重慶政府は國民生活の面に現はれた困難の一切を擧げて支那事變の結果に歸し、不平不滿を持ち、不安に脅える民衆を驅つて抗日戰線へ動員しつつあつたのであるから、反日抗日思想の根絶たるや非常に困難であつたといはなければならぬ。支那事變がなくとも、支那の歷史には天災と戰亂とが絶えることなく、その爲に民衆生活は絶えず脅威を蒙つて居たことは、中國人の中でも心ある者の熟知するところである。一時の戰爭に伴なふ困難を堪へ忍び、日本の指導によつて中國の再建を計る以外に進むべき道はないと確信して居る者も少なくないが、假りにもこのやうな意見を表面に掲げようものならば、漢奸の譏りを招き、衆愚の煽動に利用されるといふ有樣であつたのである。米英並びに中國共產黨の宣傳は、相當長期間に亙つて知識人の間に排日反日思想を徹底し、しかも殘念ながらこの思想を裏書するが如き行爲が間々支那在留邦人の間にも見受けられたのであつた。このやうな四圍の情勢下にあつて、中國人の間に日本の眞意を知らしめるには、お題目や哲學的粉飾を以て蔽はれた前記の如き新秩序理論を以てしては、到底その目的を達することの出來ないことは自明の理である。「論より證據」を以てしなければならない。殊に多年實利主義に慣れた支那人に對しては、現實の側面に具體的にして身近かな證據を示すことと在留邦人の日常の行爲によつて表現せられる日本精神に、更に一段の光彩を加へることが要望せられるのである。

久しい間、日華兩國共に相互の理解を深める努力がなく、心を專ら歐米諸國の動向とその文化とに向けてきたため、日本人は支那語と支那の傳統を解せず、支那人は日本語と日本文化の何たるかを解さないといふ狀態であつた。從つて、お互ひの思想の表現は、日常生活に於ける行爲を措いて他に求め得ないことは明瞭である。馬を羈縛して自分の欲する道を歩かしめ、自分の欲する

如く水を飲ましめることは非常な努力を要するばかりでなく、多くの場合徒勞に終るのである。況んや導かんとする者が道に通ぜず、至誠の心を有せざるに於ては、愈ゝ以て困難は倍加するのみである。

所謂對支政策の轉換、即ち根本的對支政策の確立に關して、その實施の時期方法等に就いては論議の餘地があるとしても、數年來の難問題が根本的解決へ向かつて一歩を進めたものであることは明らかである。この度決定を見た新國策は、何時かは確立さるべきものであつたのである。これがために、一時的な混亂、一時的な後退の現象が見られるであらうけれども、これらに迷ふことなく、斷々乎としてこの根本方針に基づく施策を實行しなければならない。

羈縛を解かれたものが誤つた道を進めば、これに峻嚴なる鞭を加へるは當然であるが、同時に鞭を握り、劍を擬する私ども日本人が、皇國の力に就いて絶對な信念と確信とを持つやうに修錬を重ねなければならない。羈縛を緩めれば緩められたものが勝手なことをしないであらうかといふやうな、緩める側の心に動搖のある限り、たとひ羈縛を續けたにしても、正しい道に沿うて中國を育成强化することは出來ないのである。如何程秀でた實力、優れた職能、透徹せる至誠があつても、それが從來の如く治外法權やその他の特權によつて守られてをる間は、相手の心にその本質を理解せしむることは困難である。日本自ら進んで特權を拋棄し、彼等自らの實力と眞心を以て新支那建設に邁進する構への確立こそ今回の新政策である。この根本が確立して、日本人の眞價を發揚し得るならば、中國人にも心からこれを喜び迎へる心持を生ぜしめることが出來るのである。このやうな新政策の根本を辨へて、徒らな動搖をなすことなく、所期の方針に邁進すべきである。昨年末、著者は所謂新政策樹立の直前に支那の各地の政治情勢を巡察し、更に本年一月末、蒙疆、北支を旅行して、先に述べた近代歴史に於て列國並びに支那の政治勢力の採用した諸政策を反省し、日本の力を以てこれが實を結ばしめなければならないことを痛感した。この大任は、日本人を措いて他に絶對に存しないことも又、この再度の旅行を通じて確信したところである。

既に述べた如く、蒙疆、北支の石炭、中支那の鐵の開發は非常に重要な建設の要素である。これが開發を實現するには、民衆生活安定の根本要件たる食糧問題を、まづ以て解決することが國家の喫緊事である。昨年度は、日滿支を通じて食糧增產は必ずしも所期の結果を齎したとはいへず、殊に北支の食糧難は甚だ深刻なものがあつた。このやうな情勢は直接治安や思想に影響を及ぼし中國共產黨に蠢動の機會を與へ、重慶側の逆宣傳にもよき資料を提供したのであつた。だがこの

嚴しい試煉によつて、數年間萠え出づることの出來なかつた眞實の建設方略が漸次現はれ始めて居るのである。机上の空理空論、西洋思想の糟粕を嘗めた哲學的思索ではなく、謂はゞ全身これ創痍の奮鬪努力によつて、今や中國建設の方向が確把されるに至つたことは同慶に堪へざるところである。混沌たる政治情勢の中に、力强い一道の光明が射し始めてきたのである。

國史を專攻する筆者にとつては、この支那の新しい政治動向を見るにつけても應仁文明の大亂の後群雄割據し、その歸するところを知らぬかの如く見えた時、その苦惱の中から自ら國民の歸嚮するところが示され、織田信長の勤皇の戰さによつて逸早く統一が實現せられたことを想起せざるを得ない。期せずして一に歸する。しかもこれが、人の計らひといはんより、苦惱の中に自ら成つたところにその尊さと根强さとが存する。新しき統一的氣運とは、健全にして機能的なる農村の建設こそ中國再建の根基であるといふ思想と、その思想に基づく施策とが見られる點にある。さうしてその氣運の赴くところへ實驗村又は模範村の育成が各地に於て實施計畫せられ、既に相當の成績を擧げて居る地點もあるのである。

從前北支地區の各地は、その地方の責任者の考に基づいて政治が行はれ、全體的には甚だしく不統一な施策が見られ、何れも皆期待に副ふ結果をもたらさず、中國人に對しては、皇國の對支政策が奈邊に存するやを疑はしめるやうな點もないではなかつた。そのやうな相當の撞著によつて生じた混亂も、やがて健全農村の建設といふ點に落着いたのである。むろん各地域の指導者達は同じところに着眼してゐたのであらうが、その實際の政策は、必ずしもそれを具體的に示しては居なかつたのである。この點は、昨年度に於ても必ずしも修正せられたとはいへない。各地域の指導者達は依然として舊態を墨守せる政治理念を主張して居るのであるが、このことが却つて重要な意味を持つて居ると感ずるのである。その人々は各地區の特殊性を强調する政治指導方策を固執してゐる。北支には北支獨自の政治指導理念が存在する一方、中支に於ては北支、蒙疆の政治に對する批判の論議があり、山西の政治は山西モンロー主義といふ特異の名を以て呼ばれて居る有樣である。しかるに蒙疆に於ては、德王の出身地たる西スニットと有名な百靈廟とに模範部落を作り、蒙古人達が冬季こゝに集つて、農產品や畜產品の加工をなすやうに指導して相當の成績を擧げてゐる。更に本年はこのやうな基地を五ヶ所に造つて、蒙古地帶に於ける新生活體制の模範を示さうとしてゐる。また漢人地帶に於ても特別の地帶を指定して青年の指導を强化し、この青年達を指導者とする新しい健全なる農村の建設に模範を示しつつある。

河北省の責任者は、多年の苦しい血のにじむやうな政治體驗から新秩序の建設は、新しい產業

の統一的經營管理制度の完成と、模範村の建設等であると述べて居る。山西に於ては、山西產業の成立が新しい企業形態の將來に指針を與へると共に、特に健全な農村の育成に政治の重點が置かれて居るやうに見える。山西省は、西と南は黃河に區切られ、北と東とは山脈が外部との交通を遮斷し、所謂山西モンロー主義をなすに恰好の土地である。この山西省を南北に流れる黃河の支流汾水は、その流域に豐穰な平野を展開し、農業に於て有望な將來を約束すると共に、黃土を以て表面を蔽はれた山西省の地盤には豐かな鑛脈が連つて居るのであつて、この地方に於ては古へより「土法」によつて製鐵事業が盛んに行はれて居たのである。卽ち、鐵、石炭の狸掘りをやり、鞴（ふいご）で鐵を溶かして、鍋、釜、農耕器具を作つて居つたのである。かくの如き惠まれた省內に於て、かつて閻錫山が北支に於ける覇權を目指して省城太原にフランスの支援を仰ぎつつ幾多の工場を建設し、甘肅更に寧夏、青海省に向かつて勢力を伸ばしつつあつたのである。之らの工場はその後山西の戡定と共に軍の管理に歸し、內地の各種の商社が委託管理をしてゐたが、軍需生產には赤字が出て、平和產業に於ては莫大な利益を擧げるといふ跛行の狀況が著しかつたのである。そこでわが國では斷乎として、これらの製鐵、製絲その他の工場を統合して、山西產業なるものを新たに興し、平和產業部門に於て擧げられた利益は自ら軍需工業に向けられ、全體として圓滑な經營を行ふことにしたのである。しかも、適正なる利潤と適正なる配當を考慮しつつ、新しい企業形態の實驗をなしつゝあるのである。固定資本は皇軍の管理に屬する關係から、最も大なる資本を管理するものは軍である。したがつて、そこに配當せられる利益はもつとも大きいが、その一切を擧げて新規の擴張事業に當てるといふ仕組みになつて居る。產業並びに企業の新體制が外地に於て先づ實驗的に實施せられ、それがやがて內地に新しい產業體制をもたらすに至るであらうことは、單に支那のみならず今後南方圈の建設に關しても考へ得るところである。支那に於てはこのやうな經營形態が模範農村と密接な關聯の下に行はれて居る點を私どもは注目すべきであらう。又徐州を中心とする蘇淮地區の行政にも、機能的な新しい農村建設が企てられて居るが、この地區は政治的に中支に屬し、經濟的に北支の物資補給地として活潑な活動をなしつつあつたのである。

中支の所謂淸鄕工作に就いては後に述べるつもりであるが、この工作が一面に於て淸鄕工作、卽ち徹底的な民衆搾取であるとの非難を浴びて居ることは蔽はれない。けれども、この工作の着想は、正に機能的な健全農村の建設を通じて、新しい秩序の建設に一歩を進めようとする點にある。蔣介石時代の古い敎育を受けたものは、このやうな新しい動きに關して、無關心ではないま

でも、積極的にこれに協力する意思表示をしては居ない。自然政治指導の重點が青少年敎育に置かれる傾向があり、新時代の知識人を青年の内に期待しつつあることは當然のことゝいはなければならない。新しき知識人とは、既に沒落の運命を如實に示せるヨーロッパの學問知識を學ぶものの謂ではなく、支那全人口の八割以上を占める農村の指導に挺身するものでなければならない。即ち、多年農村に育成せられた中國の傳統を護持し、展開する能力を持つものでなければならない。中國の慣行尊重は、早くから一部の人達が主張して居ることである。だがこの際、傳統と慣行とは言葉の上に於て一應區別する必要がある。といふのは、慣行の中には生成發展する傳統が存すると共に、所謂陋習、即ち拂拭すべき惡習が混在して居るからである。

北支に於ては、在留邦人達は口を開けば中國共產黨の勢力の侮るべからざることを力說する。しかるに中支の要路に立つものは、中國共產黨は既に亡びたりとの評を下してうそぶいて居る。中支にをる人々は、中支に於ても新四軍なる名で呼ばれて居る中國共產黨があるし、北支にも共產黨勢力は各地區に魔手を伸ばして居るが、中國共產黨は主觀的にコミンテルンの指令を奉じて、中國の特性を尊重しながら共產主義施策を實行して居るつもりであらうけれども、客觀的には國民運動の一翼をなし、國民運動がなさんとして居るところの中國の健全なる農村建設をやつて居るといふ見解をもつて居る。從つて、日本の指導下にある農村の指導者の至誠と技術が、中國共產黨の連中のそれに優る業績をあげるならば、或る時期には中共の地盤は直ちに治安地區たり得ると考へられるのである。この意味に於て、中國の將來は決して闇に閉ざされて居るとはいへない。日本の指導如何によつては、容易にわが國の期待する方向に轉ぜしめることが出來るのである。中國共產黨に對する警戒心を緩めてよいといふ意味では斷じてないが、中國共產黨の作らんとして居る農村より以上の農村を、わが國の指導によつて育成强化することが、何よりも有力な滅共工作である。しかもこれは中國再建方策の具體化であり、皇國の目途するところを實例を以て中國人に示す所以でもある。

以上述べたやうに、種々雜多の政治指導理念が錯綜しながら、自らその内に歸一するところが明らかになつてきたのは、日支五ヶ年の尊い努力の尊い結晶といふべく、これを更に促進して有終の美を收めるには、日本人が一段と奮起して、中國人の尊敬を受けるやうな修養を積むべきであることも又自明の理である。こゝに於て筆者は、この對支新政策に即して中國を育成强化する强力な指導の確立を要望して止まない。

四、中國新國民運動の展開

眼前の敵米英を徹底的に擊攘する情熱を益ゝ旺んならしむると共に、見えざる敵の掃蕩にも一段の努力を拂ふことが聖代に生を享けたる私共の任務である。然るに見えざる敵、心の中の敵の壓服はともすれば怠り勝ちになるから、國民相互に相戒める必要がある。こゝに國民運動が展開されねばならぬ理由が存するのである。今日私共、否世界諸民族の當面して居る課題の一つは、見えざる敵、心の敵を如何にして克服するかといふことである。見えざる敵、心の敵に對する戰とはいひかへれば、思想の戰であるが、思想の戰は、只單なる人生觀や世界觀の轉換を意味するのではなく、屢ゝ述べたやうに、新しい思想、人生觀、世界觀に基づく行爲、日常生活の刷新でなければならない。從つて、新しい理想を以て立つ國々には、例外なく國民運動が强力に展開されて居る。この運動を通じて、日常生活の態度を刷新しつゝ、新しい思想を體得せしめようとするものである。ベニト・ムツソリーニが指導者となつて展開したイタリヤの國民運動がファシストの運動である。ヨーロッパに新しい統一を招來しようとして死鬪を續けてゐるヒットラー總統の率ゐる國民運動がナチスの運動である。共產主義による世界革命を目指す國民運動に、スターリンの指揮するコミンテルンの活躍がある。最近ではさして有力な活動をなして居るとは見えないフランコ將軍のスペインに於けるファランへの運動も、戰局の推移によつて再び活潑になる時期が來るであらう。

東亞に於ては滿洲に協和會運動、北支に新民會運動、中支に大民會運動、東亞聯盟運動等があつたが、昨年一月、汪精衞氏が新國民運動を開始して以後は、逐次右の諸々の運動は新國民運動に包含せられる傾向があり、更に、わが國を中心とする興亞運動は、アジア各地域に開始せられてゐる諸々の國民運動の歸一を促進してゐるのである。興亞とはアジアを興隆する謂である。アジアを興隆せんがためには、久しい間歐米諸國の支配下に呻吟した狀態から脫却して、各ゝがその地域の傳統に目覺め、傳統に基づく新しい政治、經濟、文化體制を樹立するを要する。併しながら、永い間日常の生活を通じて滲透した歐米崇拜の思想は、さう簡單に拂拭し得られないから、どうしても强力なる國民運動を展開して思想刷新の目的を達成する外に道はない。國民運動を旺盛ならしめることによつて、傳統的なる生活體制の方が、歐米流の生活體制よりも優れてゐるといふ確信を抱かすやうに指導しなければならない。

歐米はアジア諸國に對する政策として、各地域の傳統を遮斷し、華麗なる歐米文物を以てその傳統に置きかへることに力めたから、既にアジアの知識人の間には、自らの傳統を見失へるものが少くなく、または自らの傳統を舊來の陋習としてこれを卑下し、歐米の文物を進歩せるものなりと信ずる風が廣く瀰漫して居る。國民運動を展開するに際しても、尙ほ歐米風のやり方を模倣する傾向から脱することが出來なかつた。歐米風の國民運動の行き方は、黨の活動を中心とするもので、政黨政治の中から生まれた近代歐米としてはこれ又止むを得ぬことであるが、アジア諸地域に於ては所謂政黨政治は本來的なものではない。黨の活動を中心とする國民運動は、どことなくそぐはない、板につかないところがある。蔣介石の國民運動等も宣傳せられる程でもなく、蔣介石の人氣が出たのは、却つて支那事變以後に於ける抗日活動によつてであつた。蔣介石の施策の中で比較的成果の見るべきものは、先に一言した新生活運動であり、黨を中心とする國民運動は、政爭の波紋を大にしたに過ぎぬ。新生活運動は藍衣社の幹部の一人鄧文儀を中心とする革新派の人達が計畫し、蔣介石がこれを具體化したものである。これによつて國民の一人一人が日常の衣食住を改良し、智德を磨き、國民生活全體の向上を計らんとしたが、理論より實踐に重きを置いたところに、東洋的な行き方があつた。黨を中心とし、理論鬪爭に終始する國民黨運動が些々たる成功を收めたのに比し、その成績は見るべきものがあつたのは當然である。

新生活運動を展開するに當つては、整齊、清潔、簡單、樸素を標語とした。規律正しく清潔な生活をなさしめて、禮儀と廉恥心とを啓培する素地を作り、ついで生活の藝術化、生活の生產化、生活の軍事化に發展せしめんことを提唱した。實施の項目として、「左側通行」「爪を切れ」「唾を吐くな」「阿片を飲むな」「衣服を清潔にせよ」「時間勵行」などをあげてゐる。かくの如く卑近なる生活指導より入つて、民衆の訓練、社會合作事業の促進、社會敎育の徹底といつた高次のものに自然の中に進ましめようといふ着想である。新生活運動を開始した翌年の民國廿四年（昭和十年）三月、蔣介石は更に國民經濟建設運動を展開し、次のやうな實施要項の實踐を促してゐる。これは新生活運動の進展した形であると思ふ。實施要項は、

（一）農業振興　（二）牧畜振興　（三）鑛產開發　（四）徵工の提唱による道路、水利の改修、植林の經營　（五）工業の促進、合作社を中心とする家內手工業の奬勵　（六）消費節約（七）物資の流通　（八）金融調整、貯蓄奬勵

等で、新生活運動と國民經濟建設運動とは不離一體の關係にある。蔣介石は兩者の關係について「この運動は表裏の關係にある。新生活運動は修身的で道德と精神に重きを置き、國民經濟建設

運動の『體』である。國民經濟建設運動は生產的で、行動と物質方面に重きを置き、實に新生活運動の『用』である。新生活運動は民族の精神的基礎を確立し、國民經濟運動は民族の物質的基礎を充實するもので、二者一を缺くも不可である。」と述べてゐる。このやうな運動であつたところに新生活運動が力を有してゐたのであるが、玆に更に附加すべきは、傳統の自覺と正しい世界觀の認識とのもたらす力である。傳統の自覺と正しい世界觀の上に、このやうな物心兩面からの國民の生活指導體制が確立した時、始めて新生支那の國民運動たり得るのである。汪精衞氏の指揮する新國民運動こそ、蔣介石の新生活運動に足らざるところを補ふと共に、誤つた世界觀に立脚せる黨中心の國民運動を、正しい世界觀と中國の傳統との上に導かんとする、文字通りの國民運動であるといふべきである。

新國民運動は、昭和十六年秋の四中全會で決定し、大東亞戰爭の勃發後十二月二十六日の中央常務委員會に提出せられた汪首席の手になる『新國民運動綱領』にその具體的運動方針が明瞭に示されたのであるが、この運動を展開するにあたつては、三つの時期を劃し、第一期は宣傳期として一般國民に運動の主義を徹底することに力め、第二期は訓練期として、指導員を養生し、第三期に當る實行期には新國民運動の眞義を體得した黨員、軍隊、政府公務員、學生等を中核として所期の目的に向かつて運動を推進することゝしてゐる。この運動の趣旨が端的に示されてゐるのは、國民一人々々が署名することに定められた誓詞であつて、そこには次の如く記されてゐる。

余は至誠をもつて最高領袖の指導を接受し、三民主義を服膺し、新國民運動を勵行し、中國革命を完成し、東亞解放を實現し、忠を盡くし、力を竭して一切を國家に貢獻し、生產を增進し、消費を節約し、智識を科學化し、行動を規律化し、羊を掠めず、過を諉ねず、貪汚せず、瀆職せず、努めて政治をして修明ならしめ、弊綏之風清く國基を永固に措き、世界の和平を致さんことを誓ふ。もし誓言に違背することあらば一切の制裁を受けんことをねがふ。

といふのであつて、精神作興と新しい生活體制の確立とを目指すことが明らかである。即ち、前述の蔣介石が企圖した新生活運動と國民經濟建設運動とを新しい世界觀に基づき展開せんとしたものである。このやうな目的の下に工作員の錬成と青少年運動とを行ひつつ、既に一ヶ年半運動を續け、相當の成績をおさめてゐるが、新國民運動の開始せられるに先立ち、昭和十六年七月一日を期して太倉、崑山、蘇州、無錫、常州地區に實施せられた清鄕工作こそは、實質的なる新國民運動であつたといつてよく、現に新國民運動と清鄕工作とは不可分なる關係を保持し乍ら新中國建設に邁進してゐる。先に引用した國民の誓詞には、新しい世界觀と中國傳統への復歸とが必

ずしも明瞭に示されてゐないが、新國民運動の實相を具へた清鄉工作は、治安確保、生產力增强、戰意昂揚を目指して、匪賊剿扶を行ひ、保甲制度を確立し、愛鄉會を結成し、收買配給機構を確立するなど目ざましい成果をあげ、事實の上において農村の傳統護持と米英的世界觀の拂拭に進んでゐる。去る五月二十日の最高國防會議において、清鄉事務所を新設し、その管轄下に各省市清鄉事務局が整備せられ、清鄉委員會を解消し、行政院に清鄉事務所委員長であつた汪曼雲が新設の清鄉事務局長の椅子につき、新しい構想の下に更に一段と工作を躍進させる用意を整へてゐる。清鄉地區の如きも右に記した第一地區より第二、第三地區へとその範圍を擴大し、南京より上海にわたる揚子江沿岸の重要地帶の大部分に及んでゐる。

清鄉工作の着想は、昭和十五年一、二月の頃支那派遣軍の某參謀の提案したところであつて、清鄉の目的は「國民政府の抱負を具現する模範的理想鄉を作り、全中國の民心を歸一し、國民政府を育成强化する。」といふ遠大なるところに存するのである。國民政府を育成强化するためには國權を確立し、物と金と人と技術とを與へねばならぬとし、「清心」より「清鄉」へ、さらに「清國」「清東亞」「清宇」へといふ理想の下に劃地、劃期、劃法の所謂三劃戰法により逐次建軍、建財、建政の實をあげてゐるのである。清鄉工作といふことも矢張りかつて蔣介石が企てたことであつたが、彼の場合は共產黨勢力の驅逐を目的としたものに過ぎず、今次の清鄉工作の如くに新中國建設の模範地區を作り、やがて大東亞、世界の新秩序にまで發展せしめようとする遠圖は見られなかつた。最初に手をつけた第一區の地域は、南京陷落後敗殘匪が跳梁してゐたところで、中支における共產軍たる新四軍及び忠義救國軍約二萬が玆に蟠居して苛斂誅求を事とし盛んに密輸を行つて、わが軍並びに新國民政府の施策を妨害してゐたのである。

十六年七月清鄉工作が開始せられるや、まづ武力によつてこれらの匪賊の討伐をなし、日本軍十數ヶ大隊と支那軍一萬三千四百が協力して掃蕩戰を行ひ、地區を區劃する竹矢來内においては一人の匪賊の跳梁をも許さず、武力掃蕩に相前後して李士群以下の特務工作員が前線に特別區工署を設け、保甲制度によつて漸次治安を回復すると共に、工作員訓練、徵稅制度の整備、教育の徹底に力を注いで、物心兩面に新しい秩序を整序して行つたのである。租稅の如きも以來例を見ざる程によく徵收せられ、一部民衆の間には清鄉工作卽ち清鄉工作で、民に一物をも殘さざるやり方であるとの非難をなすまでに集荷と徵稅とに好成績をあげてゐる。筆者は昨年第一期清鄉地區の中心地たる蘇縣を訪問して具さに實狀を聽取したのであるが、關係者一同非常なる抱負と自信とを以て事に臨んでゐる有樣が看取せられた。

清鄉工作は日華合作を建前とするが、治安の責任は日本、政治の責任は支那側が擔當し、清鄉地區には特別の法規を認め、他の規制を受けざることとし、政府の莫大な補助金を受けて事業を進めてゐるのであつて、この一事によつても、國民政府が清鄉工作に期待するところが如何に大きいかを推定し得るであらう。租稅の如きも從來惡稅といはれた復興稅（地方事業費）や土產物販出稅や日用品輸入稅等は漸減し、田賦の割合が增加して、健全なる徵稅體制に好成績を收めてゐる。このやうな狀況は土豪劣紳の跳梁するによき狀態でもあるので、關係者は極力彼らの跳梁を未然に防止する用意をなすと共に、力を敎育に注ぎ、青少年層に向かつて新中國建設の意慾と方途とを體得せしむるやうに指導してゐる。このために思ひ切つた人事の刷新を斷行し、敎育者の待遇改良をも考慮し、わが國より派遣した所謂派遣敎員を各縣に配置して指導の任にあたらせ、一方全清鄉地區より初等敎員を集めて再敎育を施すのみならず、敎育學院、卽ち師範學校を新設して優良なる敎育者の養成を企てゝゐる。學生生徒に對しては、新國民運動の精神の徹底を期し、四月一日を兒童鍛錬日として特に勤務に從事せしめるのみならず、隨時道路掃除を行はしめ、展覽會によつて廢物利用の觀念を植ゑ、思想指導のためには日語講座を盛んに行ふ他に、「江蘇敎育」「新學生」等の雜誌を發刊してゐる。

從來、學校は多く私立であつた關係から、このやうな新しい指導が滲透し難いうらみがあつたので、逐次小學校の私立を禁じ、鄉鎭縣を中心とする敎育制度に建直し、一校で收容し得ざる場合は分校を置き、學校を中心とする青少年の結合を計ることゝした。更にこれと呼應し、童子軍と青少年團とを總動員體制の一翼たらしめる着意の下に、大東亞戰爭一週年記念日を期して活潑なる活動を開始してゐた。かくの如く、絕えざる訓練を重ねつゝ、自衞團の內容を充實し、自衞團員中の優秀幹事が愛護會を作り、漸時國民黨の下部組織や青少年層を中心として結成せられつつあるのである。

最近の報道によれば、清鄉地區內の經濟建設は各方面に亙つて著しい進展を遂げ、江蘇省建設部の調査の結果（昭和十八年一月）清鄉地區內の民衆の平均所得は、昭和十二年（事變前）の二十七倍に達してゐることが判明した。生活費指數が十三倍に昂騰してゐることを考慮しても、地區內民衆の生活は非常に豐かになつたことを物語つてゐる。地區內の自給を目的とする農業生產體制確立のために、灌漑對策の樹立、生產資材配給機構の整備、農事試驗場の設置、增產模範區の設定もその緖につき、生產物資の集荷配給に當る合作社の活動も頓に活氣を呈し、耕作機械の大規模工業生產の計畫のみならず、製絲、製粉、織物工業の復活も亦見るべきものがあると傳へ

られてゐる。

最近まで中央化を避けてゐるかの如く見えた北支に於ても最近は新國民運動が滲透し新國民運動と一體的關係にある東亞聯盟運動に心を傾ける青年が急激に增加してゐるが、新國民運動が、黨を中心とするイデオロギー活動でなく、健全なる農村の建設を目途とする物心兩面よりする運動であるから、新民會の農村建設、數次に亙る治安强化運動の如きも、指導する主體こそ異なるけれども、目指すところに何らの相違はなく、運動の進展と共に兩者が統一に向かふは極めて自然の成行きであるといはねばならぬ。新民會成立當初の宣言には「本會は新政權とは表裏一體にして、先づこれを護持し、反共戰線の闘士となり、民力の涵養に努め、比隣共榮の實現に邁進し、以て世界の大平和に貢獻するところあらんとす。」とあり綱領としては、「一、新政權を護持し、民意の暢達を圖る。二、產業を開發し民生を安んず。三、東方の文化、道德を宣揚光被す。四、勦共滅黨の大纛の下に反共戰線に參加す。五、友隣締盟に邁進、人類和平に貢獻す。」と見え、新民會が中核となつて展開してゐる「治安强化運動」は第一次は鄕村自策、第二次は勦共自衞、第三次は對敵經濟封鎖、第四次は東亞解放、勦共自衞、動儉增產、第五次は「一、華北建設を更に進展せしめ、大東亞戰爭を完遂する。二、共匪を掃滅し、思想を肅正する。三、農產を確保し、物價を低減する。四、民生の安定を計る。」といふ標語に基づいて運動を展開してゐる。このやうな實情に鑑み、北支と中支との國民運動が根本的に一致すべきものであることが理解せられるであらう。

北支の知識人が中華思想、唯我獨尊の態度を持してゐること、建設の妨害者が主として中國共產黨であること、多年の對歐米貿易の結果食糧の自給體制が破られ、昨今非常なる食糧難に襲はれてゐることなどによつて、北支、中支の國民運動の一體化は急速には實現し得ざる有樣であるが、大東亞戰爭の進展と、租界及び治外法權の撤廢とによつて自主更生の地盤が出來たので、從來、國民運動に非協力の態度を持してゐた學生層の間にも、積極的に新國民運動に參加せんとする氣運が擡頭してゐる。歐米尊重の風を誘致する中華民國の學校生活、學科內容が拂拭せられ、優秀にして誠實なる日本青年を通じて新しい世界觀を體認し、中國の傳統に生きる道が自覺せられたならば、學生の氣分は明朗となり、氣風は刷新せられ、今一段と積極的なる心構へが出來、眞實の國民運動が滲透するやうになるであらう。新中國農村の建設を目途とするわが國の文化會館設置の計畫については、他の機會に論じたところであるが、今一息といふ國民運動の現況と學生の動向とを省みる時、愈々その必要性が痛感せられる。日本の尊い傳統を彼等に熟知せしめる

と共に、彼等學生層、青年層をして中國の傳統に生きる道を自覺せしめる時、始めて眞の日支提携、八紘爲宇の實現卽ち大東亞共榮圈の建設が出來るのである。

五、民族的傳統の尊重

以上述べたやうに、對支基本方策に則つてわが國の期待して居る如き大東亞共榮圈の一環としての中國を育成强化して行く爲には、まづ國民運動の正しい指導によつて、機能的にして健全なる農村の建設をなすべきであることは明らかである。同時に考ふべきは、そのやうな事態を正しい方向に導く爲に、現在では無理な强引な指導が政治上にも經濟上にも又文化上にも許されなくなつたといふことで、この點を考慮して對支政策に重點的な配慮がなされねばならない。從來陸軍の特務機關が、政治、經濟、文化方面の指導をなしつゝあつたが、今回それらの業務は大使館並びに公使館業務に移されて、軍事に直接必要な指導だけが特務機關業務に限定せられたこと、新民會日系職員が大量的に退散をしたこと、敵產の大部分が國民政府並びに一般中國側に移讓されたことなどは、新基本方策の樹立直後に現はれた現象である。しかし、皇國のこの新方針は國民政府並びに一般民衆にはどの程度まで理解せられて居るかは、目下のところ幾分の疑念なきを得ないところである。たとへば上海の物價が天井知らずに上昇し、その結果在留邦人の子弟に缺食兒童が現はれるといふ事實を通じて、一部の人士はこれをもつて深刻な排日行爲が行はれつゝあるが爲の如くに誤解してゐるが、かやうな事態がそのまゝ放置せられたとするならば、官廳並びに大商社に屬さざる在留邦人數十萬は、かゝる誤解のために內地に引上げてしまふといふ惧れが多分に存する。日本人を內地に引上げさせてしまふやうなことで、そこに何の日華提携が存するか。日本側としては、强硬なるべき點はあくまで强硬に、從來の商業に依存して居つた、或は不急事業に從事して居つた在留邦人の再敎育、轉業指導等を行つて、彼らを眞に中國の生產面に協力せしめてこそ、始めて日支の經濟提携が成立するのである。このやうな意味からも、在支日本臣民の再敎育と再編成が焦　の急たることを痛感せしめられるのである。このことなければ、理解なき中國側の、經濟を通じて惡質排日行爲が益ゝ激化するものと見なければならない。かうした運動を展開すると同時に、相手の面子を損ずることなく、優秀な日本の精神文明と科學技術とを中國に滲透せしめ、味はしめることに努めなくてはならぬ。

基本條約に示されたところによれば、中國の獨立を尊重し、領土や賠償金は求めないといふ鐵

則が立てられて居る。しかしこゝにいふ獨立、領土、賠償金等は、近世ヨーロッパに發達した概念に基づくものであつてはならない。何故ならば、大東亞戰爭はしば〳〵述べる如く近世ヨーロッパ的なるものの一切を否定する聖戰であるからである。新しき大東亞共榮圈といふ國生みの戰爭であるから、近世國家が有する如き領土や賠償金を問題にせず、從つて中華民國を屬國にするなどとは毛頭考慮してゐないのである。しかしその反面に、是非共明確にして置かなければならぬことは、大東亞共榮圈の確立を妨げるが如き一切の活動を斷じて許さないといふ峻嚴なる要求が存することである。まつろはざるものを言向けやはす皇國戰爭の根本が立つてをればこそ、獨立を尊重し、領土や賠償金を求めないのである。

既に還都以來三ヶ年を經た國民政府に、この皇國の期待に副ひ得る實力がやゝ備はつたと見るところから、從來の如き日本側の直接の指導を止めて、彼らの責任に於て大東亞共榮圈確立への道を歩むことを承認し、獨り歩みに必要な一切の條件を具備するやうに輔導する體制を樹立したのが、今回の支那指導の方針に外ならない。表面に立つた政治指導、經濟工作、文化政策を總べて中止した理由を私共は明確に認識すると共に、進んで中國側に誤解されざるやうに努力を拂はなければならない。しかしながら、このやうな日本の決意は必ずしも現在の中國に十全の力を認めたことを意味するのではなく、個人の場合に譬へるならば、可愛いゝ子に旅をさせ、愛弟子に武者修業の鍛錬をすゝめるのと同じである。修業の旅に出れば自然子は親心を思ふ機會が多く、親は子の成長に對して、傍らにある時より以上の心を掛けるのが當然である。日華基本條約に明瞭に掲げて居る日支文化交流なる條項に實質的な內容を與へることが、右に述べた要望に應へる唯一の道であると信ずるものである。

具體的にいへば、日本の確信がわが國の傳統を發見することによつて漸次釀成せられつゝあるが如くに、中國も亦その傳統に生きるやう誘導すべきである。これを根本的方針とし、こゝに中國の傳統の研究を日華共に大規模に遂行し、その反面には、日本の傳統をも協力的に研究する組織を作るべきである。中國人をして中國に根元的な傳統に生きる道を發見せしめることこそ、やがて皇道が支那に普及徹底することに外ならない。この傳統は、殊に農村生活に眼を向け、彼等の生活態度と信仰とを見れば明らかであらう。

先に、中國に於ては中央の政治力は縣以下には滲透せざることを述べた。地方に於ける自治自衞組織は、いふまでもなく傳統的な農村のしきたりとして現存してをるのである。卽ち、血緣的な結合としては祖神を中心とする結合が鞏固に存在し、地緣的な結合としては廟、城隍、玉皇、

五道神、娘々廟、南海老母、龍神、在裡教等といつた信仰の對象があるやうである。村の中心の村公所が土地の神である廟と共にあり、縣城、省城には縣内の廟を統一する城隍があり、城隍を更に支配する如きものとしては玉皇が考へられ、在神として五道神が、又繁榮と親睦を祈願する神として娘々廟、觀音經と道教との結合による南海老母、農業と水に深い關係を持つ龍神等が庶民の土地に連る信仰の對象になつてをる。更に人的結合關係としては、各種の會或は幇があるのである。かうした血緣、地緣、人緣の關係が、何れも道教思想によつて基礎づけられてをるのであつて、竈の神様なる土地公が、人間の行爲に對して採點をして居るといふ思想が多いことは、『功過格』なる書物が民衆の間に流布し、プラス、マイナスの點數によつて民衆の現世的な道德指導の基準を定めてをるところなども、如何にも面白い慣行の一つであるといへる。

翻つてわが國の場合を考へて見る。中國の農村にも血緣、地緣、人緣の鞏固な結合があり、その各々の結合關係が同時に存在してゐる。そして或る場合には血緣的な結合をするが、それが又必ずしも同一の關係ではないところに、地緣的な結合を生じ、或はそれらと又離れて人緣的な結合がみられる。それに對して、わが農村に於ては、血緣、地緣、人緣の關係が一つに統一せられて居る。卽ち氏神は明らかに血緣的な神様であるけれども、歷史の進展の間に於ていつしか地緣の神であるところの鎭守の神と一體になり、人間の關係はこの神々を中心とする村の結合として考へられるのである。鎭守の森を中心に、神事の司祭をなす村の長を樞軸として、圓滑な農村生活が營まれてをる村こそ模範農村であるといふのがわが國の實情である。しかして、このやうな模範的な農村には、最もよく中央の指令が滲透して居る。中國に於ては、中央の指令は農村に及ばず、農村に於ける結合關係も、それが相反した關係に置かれる場合すらあるとするならば、平和な日々をたのしむ日本の農村と、戰火に常に曝され、自衞のために組織を作り上げて居る中國農村と何れが幸、何れが不幸であるかは論議の餘地がない。卽ち、中國の農村がわが農村の如き秩序と平安とを贏ち得た時こそ健全なる中國農村が出來上つたといふべきであつて、我々は中國農村をかゝる方向に育成强化すべきである。

更にこゝに考へられることは、江戸期に於けるわが國の思想鬪爭の結論は尊皇攘夷になつた點である。德川幕府は御用學として朱熹の註釋によるところの儒學――朱子學を立てたが、學問の興隆によつて、必ずしもそれらの註釋によらず古にさかのぼつて直接に孔孟の所說を知らんとする所謂復古學派が生じた。東都にあつては荻生徂徠の蘐園學派が復古學の主流をなし、京都に於ては伊藤仁齋、東涯兩先生が中心となつた堀河學派が、復古學派として雄名を馳せてをつた。こ

のやうな復古學派の方法論並びに復古的精神が國學の領域に次第に新しい境地を拓きつつあつたのであつて、江戸期の初期以來歌學を中心として儒學偏重の弊を打破しつつあつた國學の間に、老莊思想卽ち道敎的な考へ方が多分に影響を與へつつあつたことは、眞淵の學問の系譜がこれを明らかに示して居り、わが國の傳統的思想と道敎の說く思想との間に、一脈の繫りの存することを物語つて居る。このやうな國學の思想が、復古派の儒敎の方法論或は淸朝に於ける考證學の實證的方法論を活用し、次第にわが古道を明らかにして行つたことは、こゝに改めて說くを要しないであらう。

しかるに、復古神道、垂加神道、國學等が、日本人のものの考へ方と學問の態度を敎へた功績は、近代の思想史上で閑却すべからざる重大なるものであるが、國內的問題にのみかゝづらはつて、大經綸を生むに至らなかつた憾みがないではない。水戸の『大日本史』といふ具體的な國史の研鑽及び編纂の事業を中核として展開した水府の敎學には、旣に述べた如く逞しき經綸が存する。それは當時の國內の諸々の學問を相戰はしめつつ國體觀念を明徵ならしめ、同時に明徵なる國體觀に基づく經綸を砥ぎ磨いたのであつて、その結論が尊皇攘夷の大旆として、明治維新指導の根本方針になつたのである。

このやうな思想史の跡を辿る時、中國の人口の八割以上を占めて居る農村の思想が、わが國と決して無關係でないのみならず、わが江戸期に於て、尊皇攘夷思想の生まれ出るまでの間その所を得しめられてをることを知り得るであらう。しかりとすれば、中國農村の思想指導もまた、思想的修鍊を經たわが靑年によつて、具體的農村建設指導と平行して行ひ得るものと見なければならない。從來やゝもすれば、農村に對する指導が日本流のやり方を直ちに中國農村に流入せしめることを以て能事了れりとする風があつたが、そのやうな方法は必ずしも當を得たものではない。わが國が本當に今革新せられつつあるのは、わが國の傳統の發見によるものであるといふ事實を身を以て中國農村靑年に理解せしめ、彼等も亦中國の根元的傳統によつて、農村の再組織を果すやうにならしめることが、眞に中國農村更生の方途であり、同時にこれが東亞共榮圈の一環としての中國建設の根基を培ふ所以である。

しかるに現在日支關係を見るに、日本の傳統の探究と闡明といふことは近時次第に行はれるに至つたけれども、中國の傳統的文化研究に就いてはわが國に指導組織を全く缺くとまではいはないが甚だしく不備である。支那學の研究といへば所謂儒敎の研究に偏し、東洋史研究といへば、歐米人殊に古くはフランス、ロシヤ、近くはアメリカのアジア侵略の爲の支那研究、或は支那歷

史研究の糟粕を嘗めるが如き研究に流れ易く、眞に中國の根元的傳統的文化の今日命脈生きてをる姿に對して着眼するものは甚だ少い現狀である。しかも中國の政治指導は勿論のこと經濟建設にしても、中國の傳統を無視しては到底行はるべくもない。歐米人の如く中國の傳統を遮斷して、異質の彼等の文化をそこに樹立することを目的とせざる皇國臣民としては、總力を擧げて支那の傳統的文化の闡明と、これに基づく支那建設方途の考究に邁進すべきである。

以上のやうな考へ方に基づいて、支那には日本文化の普及の基地たるべき日本文化會館を設立して、少壯有爲の學徒を彼の地に派遣し、中國人の間に、日本並びに日本人の眞價を理解せしめ、これと不卽不離の關係にある支那傳統の調査研究所を設け、有爲なる調査員、研究員を支那各地に派遣して、精魂を傾けて調査研究に從事せしめる施設を一日も速く確立するならば、日支の結合はそれだけ早く成就するものと信ずるのである。日本文化の宣揚、中國の傳統の研究に從事する數多のものが、支那各地に駐在するのに對して、中國側が間諜呼ばはりをし、又は間諜の嫌疑を抱くことは日華基本條約の日支文化交流の條章に徵して明らかに許すべからざることである。もし假りに日本人が見て差支へあるが如きことが支那側に於て行はれてをるならば、これ又基本條約の實に副はざるものであるから、斷乎として抗議すべきである。日本文化會館と支那傳統調査研究所の職員が、誠心誠意所期の目的に向かつて努力することは、やがて皇道の普及を實現することになるであらう。また適當なる人事の按排が考慮されるならば、日本人一般の中國に對する理解の度は飛躍的に深められ、日華提携の實が擧げらるべきは論を俟たない。むろんこれと表裏する中國側の機關として、日本內地に支那文化會館並びに日本の傳統調査研究所が設立せらるべきであつて、これら兩者が相携へて眞の日華文化の向上に努め相互の理解が進められるやう配慮すべきである。

しかしながら、目下支那には重慶、中國共產黨の如き日本に反抗する政權が現存し、現に日本留學生の間から、間々敵方に趨るものさへ出してをるのであるから、日本內地に於ける中國人の日本研究に對しては、日本人の國府下に於けるが如き自由を認めることは斷じて許されない道理である。然のみならず、中國人の手を借りるまでもなく、日本の傳統に關する調査研究は既に相當の成果を收めて居るから、特定の地域に限り日本の傳統に關する研究者を招致するだけで、中國側の日本傳統調査研究の希望は滿足させることが出來る。文化會館並びに傳統調査研究所の設置運動に關する日華の差別は峻嚴になすべきことが眞の平等を意味するのであつて、中國內部に前記の如く、排日政權乃至は米英陣營の存する限りは、彼等をしてわが國の國情調査に類するが

如き活動を完封する用意が必要である。以上述べたやうな事情から、差し當り中國には、支那傳統調査研究所を主體として、これに日本文化會館を併設し、日本に於ては、支那文化會館に日本傳統調査研究所を併置して、日華兩國人の提携を促進すべきである。かくて日本文化の普及と宣傳とは在支邦人の日常生活を通じて自ら滲透せしむるを主とし、從來見るべき業績のなかつた支那傳統を實地について調査し、中國人の感情、性行等に就いて日本人全部が精通し得るやうにつとめなくてはならぬ。

しかしこのやうな調査研究は、單に學究の徒のみに課すべき性質のものではなく、軍官民が等しく中國の傳統の究明に着眼すべきは勿論である。所謂在支邦人の錬成、日本留學生の錬成等の如き教育と密接なる關係を保ち、被教育者は、日華の別なく卒業後はこの機關の一翼たりうるやうに指導するのが肝要である。先に中國再建の中核は、健全にして機能的なる農村の建設に存することを述べたが、支那及び日本内地の調査研究機關、錬成教育機關が足並を揃へ、中國人をして中國の傳統に生きる道を體認せしむる方策を樹立し、最初は在日留學生を主とするも、逐次計畫的に有爲有能の農村指導の任に當るべき農村青年を誘致して、彼等に棄つべき陋習と活すべき又尊重すべき傳統とを識別し、強く正しい道に進む熱意と氣力と實踐力とを賦與したならば、多年中國共產黨の跳梁に痛められた中國の農村が、こゝに始めて光明ある又豊かな將來を約束せられ、平安な生活への道を辿り得るに至るであらう。彼等はこれを王道樂土と考へ、その王道樂土を與へてくれた日本と心から協力一致せんとするの熱意を持つに相違ない。日本を知る多數の中國人あり、支那の大局、支那の現實に精通する日本人が、以上のやうな施策の運用によつて次第に多くなり、相互に不可分の人的結合關係が育てられてきたならば、假りに國民政府の施策が謬り、これに對して皇國が斷乎たる處置を講ずるやうな不幸な場合があつたにしても、そのやうな不幸を轉じて兩國の眞の提携に展開する人的組織がこゝに作られるのである。六ヶ年に亙る日支關係は確かに大いなる試煉であつた。その間に尊い教訓があるやうに思ふ。支那事變當初のやうな相互の認識不足を今後も尚ほ續けるが如きことは斷じて許さるべきではないと思ふ。

以上中國の問題を稽りて東亞新秩序建設の道が各々その所を得しむるに各々の傳統的文化の再建を以てすべきであることを述べたのであるが、思ふにこの原則こそが中國のみならず、共榮圈各地に適用せられて然るべきものであると固く信ずるものである。

東亞共榮圈は、前述の如く所謂季節風の地帶であり、米食を主とする圈内にあつて農村を主とした國々によつて成り立つて居るから、まづ健全なる農村、機能的な農村を基盤として、大東亞

共榮圈の國土計畫がなさるべきである。農村には必ず相通ずる農村の傳統の存すること又想像に難くないところであるが、數千年の歷史に、鍛錬に鍛錬を積み、しかも歸一すべき國家の中心を持つわが農村こそは、大東亞共榮圈建設の鑑である。最近滿洲に盛んにわが開拓移民が出動して、滿洲の食糧自給の根基を固め、同時に國防力の培養地として重要なる役割をなしつつあるが、農民の精神がこの新しい土地に適合する新しい農耕を生むことによつて、眞に滿洲農民の鑑として仰ぎ視られる時期が必ず來るに相違ないと考へられる。朝鮮半島の農村の如きは、從來農村といふに値ひしないのであつて、眞に安定した精神的な中心もなく、流浪の民が一時定着したものに過ぎなかつたが、皇國の重要な一部分を形成すると共に、健全な農村としての機能を持つに至りつつあることは明らかである。現にある知事の如きは、眞に以て範となすべき農村の建設のために種々の努力を傾注してをるが、內地同樣の姓氏を使ふことを奬勵した結果、氏神の問題が新たに起りつつあるといふ。皇國農村の精神的紐帶として、氏神と鎭守の神々とが一體關係にあるが如き關係が、朝鮮農村に於ても逐次形成せられる有樣である。

鮮滿旅行より歸任した一官吏は、このことを目して、「朝鮮には色々の問題があり、部分的には種々の困難が未解決のまゝに存するやうであるが、大局的な觀點に立つならば、朝鮮は今內地と全く變らざる姿に至る大轉換をなしつつあるやうに見える。卽ち、天つ神と國つ神とが生じ、姓氏を內地化するこの方針によつて思はざる成功を遂げつつある。」といつたことなども、傾聽に値ひするものといはなければならない。

農村の根元的な文化傳統は、各地區共に大差ないものであり、しかもその內最も優秀なものがわが國のそれであることを思ふならば、東亞共榮圈の完成の曉、日本を中心とした東亞共榮圈文化の姿が如何なるものであるかが、容易に想像せられるであらう。日本の傳統を本當に體認し居らざる日本人が、日本本然の姿に非ざる日本を押しつけ、徒らに各地區の住民の反撥を買ふとしたならば、この上もなき愚劣なこととといはなくてはならぬ。日本人各自が常にこの點を反省して、日本の傳統を體認し、外地にある者はそれ自らが傳統に生きつつある姿を以て——卽ち彼等自らの行動を通じて、日本の傳統を具現するといふ態度を以て臨み、各地區の人々にもそれ〴〵の傳統に復歸せんと欲する意慾を持たしめなければならぬ。又そのやうな意慾を持つた人々に對して、傳統的文化探究の道と、それに基づいた日常生活刷新の方法とを指導したならば、彼等は自主的に又非常な誇りを抱いて大東亞建設に從事するであらうし、しかもその建設せられた結果は必ず渾然と日本文化の一翼たることが出來るであらう。最もアメリカ化された比島の文化の如

きも、この方式を以て臨んだならば、必ず共榮圏の一環たるべきルソン島になり、或はミンダナオ島になり、六千數百の島々は匪賊跳梁の基地たることを止めるに至るべきは明らかである。徒らに表面的なアメリカニズムの打倒を叫び、スペイン、カトリック文化に對する彈壓を下したとしても、彼らの向かふべき方途が明示されなければ、混亂を招くことは免れ得ない。聞くところによれば、今日マニラの圖書館の所在地はかつての日本町の跡である。米西戰爭當時、比島獨立の爲に奮鬪したアギナルド將軍の如きは、アメリカ人のものした傳記に於ても日本人の子孫とされて居る。バタンタス州のタール地方には、日本人の子孫が少くないといはれ、土俗的に見ても、日本人の風習と甚だしく近似したものがあるさうである。アメリカの統治下に於ては、日本人と親緣關係乃至は日本文化と比島文化との關係を强調することは固く愼まれてゐた爲に、日比兩國の間の深い關係の如きも從來暗黑に閉ざされてゐたのであるが、このやうな親緣關係を研究し、これを兩國國民に理解せしめることは、兩者の親善にもつとも役立つものであらうが、より根本的な問題は、彼等をして彼等のスペイン渡來以前の比島に着眼せしめ、比島の風土と比島の歷史と傳統とを卑下し輕蔑するかつての風潮を是正せしむることである。和田義隆著『比島史』にスペイン人の來攻以前のフイリッピン人の生活に就いて記したところを見ると、當時の比島の原住民の生活は、今日の日本人のそれと相通ふところを多分に持つて居つたことが分かる。卽ち、

當時のフイリッピン人は極めて禮讓、優美であつたとキリノ敎父は言つてゐる。「人に出會ふと頭に卷いてゐる手拭に似た布切を脫ぐ。目上の人の前で立つたまゝでゐることは非禮であるとされ、地面に坐るか。膝の上に身を屈するかする。言語も階級に應じて甚だ複雜な敬語が嚴守されてゐた。」またアントニオ・デ・モルガによれば「男女を問はず、とくに酋長などが人を訪問するか寺院に赴くときには、非常にゆつくり落着いて歩いて行く。男女多數の奴隷がそのあとに從ひ、主人のために絹の傘をかかげて日光や雨を遮る。女が先頭に、そして女の召使や奴隷がそれに續き、そのあとから彼女らの夫、又、兄弟が男の召使と奴隷を連れて進んで行く。」兩親長上に對しては非常に尊敬の念が厚く、「父の名を口外するさへ非禮とされ、一般に大人はもとより子供までこれを守つてゐた。」「男女とも、とりわけ酋長たちは、體も衣服も非常に清潔に保ち、頭髪はゴゴ（Gogo）と稱する木皮を煮沸した湯で洗ひ、その上に香油をつけ、漆黑なるを賞した。

といはれて居る。宗敎に就いては、

當時のフイリッピン人は多數の偶像、例へば動物、鳥類、卽ち鰐、鳥などを信じてゐたが

中でもタガローグ語で「全能」または「造物主」を意味する「バタラ」(Badhala)と呼ぶ青もしくは黄の神祕な鳥を尊敬してゐた。また太陽、月、星を敬ひ、「アニトス」(Anitos)と呼ぶ小さい像を作つて祖先を崇拜し、一般に生靈を信じてゐた。祭には酋長の家に集り、祭壇を設けて嚴肅な祭事を行つたが、祭は通例四日に亙つて行はれ、大小の太鼓が打ち鳴らされた。

と述べられて居るなども、さながら『古事記』の記事を讀む心地がする。又經濟方面を見ても、

米を常食とし、甘蔗、コ、椰子、麻の栽培を主とし、農耕の方法も今日に比してさ程劣つたものではなかつたらしく、農具等も今日と變らず、木製の臼と杵で精白した。男子が田畑で働けば女子が米の精白を行つたのである。水田や畦の作りも今日と變らないが、特に注目すべきものは、現在も北ルソンに廣く存在してゐる大規模な石垣積みの水田である。階段式に谷底から山の頂上へと何十段、何百段に水田を築いてあり、恐らく過去何百年に亙つて苦心して作られたものと思はれる。

等と述べられて居るのである。

又將來のこの地方の問題を考へる上にも非常に興味あることは、從來最も重要な產業が造船業であつたことである。フイリツピンは非常に多くの島々から成つてゐて、交通上船舶が必要不可缺のものであつたこと、かつ群島内で木材の獲得が極めて容易であつたことなどから、當然さうあるべきであるが、かうした傳統的な比島人の生活が忘れられて、一途にスペイン文化乃至はアメリカ文化を中心とする比島が出來上つた。宗教に於ても本來の宗教を失つて、八十%以上がカトリツク信者であるといふ現情は、比島にとつて不幸であるばかりでなく、かくては東亞共榮圈の一環たるの資格を有せざるものといはなければならない。

この比島の如きも、スペイン渡來以前の彼等の文化、衣食住に亙る彼等の傳統が、歴史の修錬と風土の試煉とを經て自ら生まれた最も尊重すべきものであるといふ觀念を、比島の知識人の間に植ゑ付け得たならば、これによつて比島文化は大いに躍進し、共榮圈の一環としての役割を立派に果たすに至るであらうと思ふのである。

話は共榮圈建設から傳統的文化尊重の問題に終始したのであるが、これは筆者がこの方向こそ唯一の建設の目標であることを固く信じたからに外ならない。

六、滿洲國及び朝鮮の問題

共榮圈の建設史の第一頁を形作る滿洲の現狀に就いては、昨年建國十周年の記念祭を實施した機會に、建國の大業に參畫した各方面の識者によつて、充分說明せられてゐるから、滿洲國の全貌に亙つての詳細な說明はその必要を見ないであらう。滿洲の第一次五ヶ年計畫が既に一應完了し、本年度は第二次五ヶ年計畫が實施中である。第一次五ヶ年計畫の經驗は、滿洲國の經營にとつて尊い經驗になつたやうであり、從來重工業部門にのみ重點を置いたことに對して修正が行はれてをるやうに思ふ。

滿洲の產業五ヶ年計畫は、滿洲國政治の集中的な表現であることはいふまでもないが、第二次五ヶ年計畫の發足に當つては、經濟の部面が特に重視せられ、日滿支經濟建設要綱に基づいて、東亞共榮圈の自給自足經濟の急速なる確立を目標とする、日滿支廣域經濟の一環たる使命達成を期してをるのである。卽ち第一次計畫が、滿洲國の自力充實に存したのに對して、第二次に於ては、日滿支を統一する方策に基づいてをることが今次の計畫の著しい特徵である。これは第一次が、總花的な開發方針であつたのに對し、今回のは重點主義に移つてをり、鐵、石炭、農產物の增產といふ戰力增强を主軸とした開發に重きが置かれて來たのである。

第一次の計畫に當つて、生產力擴充問題が所期の如き成績を擧げ得なかつた一つの理由は、滿洲のそれが日本內地の如く年次を追うて凡ゆる生產部門の發達した地域について行はれなかつた點にある。厖大なる近代的工業が日本內地の或る地區に計畫せられた場合に、機械の修繕補給等が比較的容易に出來るけれども、滿洲國の如き近代工業の處女地に於て、內地に於てすら見られなかつた如き大工場が計畫運轉せられた結果、機械が破損した場合の如き、これが修繕を內地又は外國に依存せざるを得ぬ爲に、半年一年の不便を忍ばなければならないといふことが屢々あつた。卽ち大工場の經營に必要な副次的產業が漸次計畫されねばならなかつたのであるが、この點がうまくゆかず、ために所期の成果を收め得なかつたといはれて居る。又從來は日用雜貨品の如きは滿洲に於ては生產せず、主として內地から輸入する方式で進められたのであるが、五ヶ年計畫後に於て新しい東亞の事態が生じたのでこの點を修正し、雜工業の育成强化も同時に考慮せらるゝに至つたのである。

建部總務長官は、筆者らが昨夏滿洲國を訪問した際、今や滿洲國は十ヶ年の尊い體驗を持ち、

反省期に入つたと述べられたが、甚だ意味深長なる言葉である。長官のいはれる如く、滿洲國官民は今一度大東亞戰爭開始以後の世界の新事態に處する心構へを反省して行く必要があるやうに思はれる。滿洲國の出現といふことは兎も角近世世界史の重大事件であつたが、五族協和して理想的な國家を作るといふことは、世界史の未だ經驗せざるところである。日本の指導に依つて五族が共同目標を建設する委が、理想的國家の創成に至る道であると說かれてゐるが、これこそは共榮圈建設の先導をなすのみならず、新しき大東亞共榮圈の將來を示唆したものといへよう。各民族が、各々の利害打算に基づいて私利私慾を追求するのが近世的國家の通弊であつた。滿洲國建設に當つては、五族が各々其の所を得ると同時に、理想國家の共通目標を目指して相競ふことによつて國を營まんとして居る點に注意すべきである。無論この中に於ては、日本人も、他の者と平等の關係に置かれて居るのであるが、萬國に比類なきすめら御國こそ、理想的な國家の實體をなすことは炳乎たる事實であつて、この點に深き思ひを致された　皇帝陛下は、建國神廟に天照大神を祀られてをるのである。昭和七年三月五日、即ち大同元年の建國宣言に於て、

一、軍閥を根絶し、王道政治を行ふこと。

二、民族共榮の天地を建設すること。

三、內を安んじ、外に和し、こゝに世界政治の模型を作ること。

が宣言せられ、『回鑾訓民詔書』、『國本奠定詔書』、『時局ニ關スル詔書』、『建國十周年ノ詔書』、何れもこの根本精神の闡明に外ならない。殊に日滿の關係を說かれたものとしては、『回鑾訓民詔書』に

朕

日本天皇陛下ト精神一體ノ如シ爾衆庶等更ニ當ニ仰イテ此ノ意ヲ體シ友邦ト一德一心以テ兩國永久ノ基礎ヲ奠定シ東方道德ヲ發揚スヘシ

とあり、『國本奠定詔書』に於ては、

天照大神ヲ奉祀シ厥ノ崇敬ヲ盡シ身ヲ以テ國民ノ福祉ヲ壽リ

と仰せられ、さらに『時局ニ關スル詔書』即ち大東亞戰爭の大詔渙發の時の詔書には、

共同防衞ノ義ヲ結フ死生モ斷シテ分攜セス

とあり、また『建國十周年ノ詔書』には、

親邦ノ天業ヲ奉翼シテ以テ報本ノ至誠ヲ盡シ力ヲ國本ノ培養ニ努メ神人合一ノ綱紀ヲ振張シ以テ建國ノ明命ニ奉答スヘシ

と仰せられてある。民族協和の本質はこゝに存するのであつて、東亞聯盟或は東亞協同體等の如

き歐米的乃至は共產主義的な協和思想では斷じてないことを銘記しなければならない。

協和會の運動の如きも、このやうな新しい國家形成を目指し、官邊の施策を民衆組織として更に徹底せんとするものに外ならないが、更に昨年に至つて、大東亞戰爭の完遂の爲に新たなる施策が講ぜられた。卽ち、國民皆勞體制の確立がそれであつて、『滿洲國基本國策大綱』の中に「勤勞興國の實踐」なる條項がある。

國民皆勞の體制を確立し、勞働力の自給自足を確保すると共に勞働生產の向上、勞務管理の改善を圖り以て我國土建設及び產業開發の飛躍的發展に備へるものとす。

一、國民皆勞體制の確立

勤勞尊重の氣風を作興し勤勞奉公制を實施すると共に都市浮遊勞働力並びに女子勞働力の活用等を併せ行ひ以て國民皆勞體制を確立するものとす。

二、勞務體制の强化

(一)勞務配置については事業別配置統制を强化すると共に民族別及び性別適正配置を考慮するものとす。尙男子商業使用人數を制限する方策を講ずるものとす。(二)勞賃の昂騰防止を强化徹底するものとす。(三)技能者の登錄を整備しその動員體制を確立するものとす。

三、勞働生產性の向上

(一)生產方法の機械化を徹底せしむるものとす。(二)勞務者の技術的訓練を强化すると共に技術の改良及び優秀技術の導入を積極化するものとす。(三)能率增進を圖る爲技能競練を積極化すると共に國家的褒賞の方法を講ずるものとす。

四、技術者の養成

普通技術者及び技術工の養成については企業體の自家養成を原則として各企業體をして積極的にこれを行はしむるものとす。尙これが國家敎育制度との密接なる結合につき特別なる考慮を拂ふものとす。

五、勞務管理の改善

(一)生產的勞働の公共性に照應し勞需物資の確保を圖るものとす。(二)災害防止の徹底を期すると共に保健、衞生、福祉施設の整備充實を圖るものとす。

滿洲國の新たに遭遇した事態に卽應する體制が備へられたことを意味する。卽ち、國民皆勞こそと見えて居るのである。滿洲建國當時必ずしも豫想せられなかつた大東亞戰爭の勃發によつて、はその具體的現はれであつて、康德七年四月十一日に公布された國兵法による國民皆兵制と共

に、戰ふ滿洲國の一大特徴をなすものといふことが出來よう。國兵法の公布に當つて下された上諭には、

夫レ國本ノ固キハ必ス國民ノ一心ニ賴リ國運ノ競フハ必ス國軍ノ精强ヲ恃ム是ヲ以テ古者兵ヲ農ニ寓シ通國ノ民ヲ舉ケテ悉ク干城ノ任ニ充テ斯土ヲ踐ム者ヲシテ咸ナ捍禦ノ責ヲ奉シ斯毛ヲ食ム者ヲシテ咸ナ稼穡ノ務ヲ重ンシ倉々國ヲ離レス事々公ヲ忘レス治ニ居テ備アリ警ヲ聞テ患ナカラシム良法美意歷々徵スヘシ我カ國盟邦日本帝國ト夙ニ一德一心ノ誼ヲ以テ申ヌルニ共同防衞ノ約ヲ以テス

國軍ノ制其ノ根本方針ニ於テ固ヨリ毫釐ノ出入ヲ許サス矧ンヤ東亞ノ現形曠古ノ創局惟タ我カ兩國ノ力ヲ待テ其ノ興廢ヲ決スルヲヤ

朕深ク之ヲ鑒ミ茲ニ精鋭ナル國軍ヲ建置シ人民ノ中堅ヲ錬成センカタメニ組織法第三十六條ニ依リ參議府ノ諮詢ヲ經テ國兵法ノ眞意ヲ體シ審カニ時運ノ進展ヲ察シ獻國ノ志ヲ奮ヒ奉公ノ誠ヲ致シテ千載不拔ノ國本ヲ固クシテ萬邦具瞻ノ國運ヲ揭ケ以テ我カ建國ノ本義ヲ貫徹スヘシ此ヲ欽メ

とあり、建軍の本義を明らかにし、更に勤勞奉公法の上諭には、

夫レ治國ノ要ハ民心ヲ作興シ民力ヲ集結シ鍛錬造就以テ其ノ本ヲ固クシ其ノ根ヲ培フニアリ朕茲ニ勤勞ヲ以テ青年國民ヲ錬成センカ爲組織法第三十八條ニ依リ參議府ノ諮詢ヲ經テ國民勤勞奉公法ヲ制定シ有司ヲシテ公布明示セシム

爾衆庶其レ宜シク克ク本法ノ眞意ヲ體シ詳カニ世運ノ推移ヲ察シ益報國ノ誠ヲ致シ愈奉公ノ志ヲ奮ヒ以テ我カ建國ノ本義ヲ貫徹スヘシ此ヲ欽メ

と仰せられ、以て大東亞戰爭下に於ける滿洲國の根本體制を明示し給うたのである。

尙ほ近時、滿洲に於ては、日本人に對してとかくの批評のあることを屢〻耳にするが、彼等のいふところは、王道樂土を理想とした滿洲が、建國十年にして必ずしも王道樂土となつてをらぬことをいふのである。しかしこのことは、滿洲建國當時と今日に於ては客觀的情勢が甚だ異なり、建國當時は、滿洲自體の滿洲を考へればよかつたのに對して、今日に於ては、日滿支不可分一體の關係の下にその一環としての滿洲を考へなければならぬことに起因する。食糧問題に於ても、或は鑛產資源開發の問題に於ても、滿洲自體の立場からのみ立案し得ざることゝなつたのである。關東軍の活動に要する戰力增强の責任も亦滿洲國が持つべきはいふまでもなく、更に大東亞戰爭完遂の爲の戰力增强に對する分擔をもなすべき義務も負うたのであるから、抽象的な王道樂土思想によつて經營せらるべき面は必然的に非常に縮少せられたのである。國民皆勞體制の確

立によつて勞働力の不足を補ひ、重工業部門或は農業部門、更に土木建設の部門に汗の奉仕をなすことが、やがて將來の王道樂土への道であることに氣付かざることは、多年虐げられた滿系滿洲人としては止むを得ざることといふべく、この點を充分に理解せしめる如き指導が現下特に必要であると思ふ。

第二の問題は、戰爭に伴なつて心身共に一流の日本人が主として戰線に活躍する結果、二流三流の人間のみが銃後を守り、滿系鮮系と肩を並べて仕事に從事する關係から、日本人の資質について彼等が從前とは別の觀念を抱き始めたことである。日本人は、智德に於ては勿論又體力に於ても自分等の遙かに及ばざるものと觀念して居た彼等の前に、心身共に一流の青年が見られなくなつたのであるから、深く考へざるものの間には、日本人の資質に對する疑念を生じたのも又止むを得ない。要するに當分の間は銃後に殘つた人達の奮起に俟つ以外に方法はない。

かゝることは、最近の朝鮮問題に關してもいひ得るところであつて、これを如何にして解決するかが、滿鮮に於ける所謂民族問題の課題である。青少年義勇軍の活動並びに開拓移民の問題が、これらと深い關聯を有することはいふまでもない。と同時に、義勇軍の問題は內地に於ける教育刷新と深い關係を持ち、當初は人口問題として考へられてゐたものが、次第に民族優秀性保持の爲の教育體制及び教育內容革新の問題に進展してをる。單なる移民問題から、農村を基盤とする新しい東亞建設の實踐の中核を義勇軍に期待する風潮が次第に濃厚となつた。久しい間惱みの種であつた義勇軍指導者の訓練に關しても、本年より特別の配慮が拂はれるに至つたことは、開拓移民問題の將來に一道の光明を投げかけるものといへよう。

昨夏、敦化周邊に於ける義勇軍出身の開拓村と、神戸の轉業者による移民の活動狀況を視察する機會を得たが、義勇軍出身者は眞に農村の子として働きながら、尙ほそこに、國家の恩惠に依存せんとする弱い心の存する點を指導者が指摘して居る。移民問題が一つの國土建設であることを思ふならば、農村を中心とした一つの國土經營の問題が考へられねばならぬが、かうした點に於て嘗ての義勇軍の指導には弱點があつた。先に述べた義勇軍指導者問題は、かゝる過去の缺陷を補はうとしたものである。これに反し、神戸の開拓移民は、殆ど農業の經驗を持たざる人々によつて行はれたものであるが、農業の體驗を持たざることが却つて、滿洲に於ける農業經營の體驗者の意見を率直に受け入れることになつた。最初は婦人達もサラリーマンの家內の域を脫せず、薄化粧などをして主人を送り出す慣習があつたり、除草に當つて、播種したものと雜草との區別がつかなかつたり、稻を馬に食はれても知らなかつたり、笑へぬ喜劇を體驗したが今日に於

ては、農に生きる喜びを漸次感得すると共に、嘗ての職業體驗を團長の下に十二分に發揮せんとしてをり、農村の分村とは違つた活氣を見せて居ることが注目に値ひする點である。

滿洲に開拓移民をすることは、日本の健全な農村を滿洲に扶植することである。健全な農村とは、機能的な性格を持つものである。かうした點が健全に農村の中に生かされることによつて、來たるべき時代の模範村が建設せられる。この點に於て、轉業移民、轉業開拓村の將來に期待すべきもの少なからざるを思はせられたのである。

東寧附近は滿ソ國境の第一線であり、緊張した國境の空氣を直ちに感得することが出來るが、この方面ではソ聯のコルホーズと境を接して、內地各方面から選拔せられた農民達による皇國農場が經營せられて居るのである。こゝに働く農民達の姿は、嘗ての北海道の屯田兵を想起せしめるものがあるが、かうした勤勞報國を狙ふ農村人の教育が更に積極的に行はれることによつて、安易に流れる傾向のあつた一部農村に、眞の國家意識を植ゑ付けることが出來たならば、皇國農村の更生にも大きな貢獻をなすのである。かゝる施策がより大幅に實行されることを期待せざるを得ない。國內に於ける勤勞奉仕に素より必要であるが、苦力意識を學生や農民に與へることは必ずしも策を得たるものではない。日本臣民は一人々々が東亞共榮圈の建設者指導者としての自覺と責任を抱くやうに指導せらるべきであることを、東寧近傍の報國農場視察によつて特に感ぜしめられたのである。滿洲の國防的な意義、並びに滿ソ關係等に就いていふべきことがないではないが、これらに就いては既に各方面から論ぜられて居るから、改めて述べることを省略する。

滿洲に於ける如上の問題は朝鮮に於てもまた小磯總督、田中政務總監によつて强力に確立せられようとして居る。昨年六月二十六日、道知事會議招集に際して小磯總督は、道義朝鮮の確立を力說して、次のやうに述べて居るのである。

凡そ何人も、皇祖皇宗肇國の史實に鑑み國體の本義に徹底したならば、內鮮は太古より不可分の關係にあつた所以をも體得することが出來、內鮮一體の心底をも認識把握することが出來るのである。從つて、半島に於ける敎學は勿論、施政一切の根基を國體の本義顯現に置き、官民一致協力して道義朝鮮を不拔に樹立すべきである。

この目的を達成するために、從來兎角非難のあつた吏道の刷新、產業經濟施策の整備に一段の努力を要望して、爾來この方針に基づいて半島の經營は着々と進められて居るのである。これまで朝鮮に於けるアメリカ敎會の暗躍があつて朝鮮問題に陰影をなげかけてゐたが、大東亞戰爭によりアメリカ勢力が半島より驅逐されたことは、小磯總督の所謂內鮮は太古より不可分の關係に

あつたといふ信念に基づく半島の皇民化にとつては、非常によき條件を作つたものである。朝鮮に於ける徴兵制度の確立、內地人同樣の姓氏を用ひること、或は義務敎育制度の確立等々、實施の上に於て相當の波瀾を豫想せられる問題もあるが、必ずやこれらによつて、內鮮一體の關係が樹立されることを信じて疑はない。

朝鮮併合の初期に朝鮮に赴いた內地人の行動がよろしきを得ず、さういふ時代に成長した半島青年は當時の政治的環境に應ずるには法律の修得を以てするより外はないとの觀念を抱き、今日に於ても尙ほかゝる意識に基づく法律萬能主義が濃厚であつて、之が內地に留學する半島青年の間に主流をなして居ることはまことに遺憾である。半島青年の向學心の如きも、單なる內地人に對する對立意識によつて裏付けられて居るのは寔に憐れむべきことである。第一章に述べた如く、皇國の學問は　天皇に歸一するところの實踐そのものであることを思ふならば、內鮮一體の爲の學問は、半島青年が皇國臣民としての實踐を擧げることに於て始めて期待し得るのである。內地人が今日拂拭せんとしつつある近代ヨーロッパ學を、遲ればせながら半島出身青年が熱心に學びつつあることは痛ましき限りといはなければならない。高等文官試驗に數多半島出身の青年が受驗して成功したこと、或はオリンピックに於て半島出身者が大なる成功をなしたといふことも、對立意識に基づいて居る限り決して半島の皇民化に貢獻するものとはいへない。ビルマ、フイリッピンの獨立が再び輕薄なる半島青年を驅つて不幸なる慾望を刺戟するかも知れないが、東亞共榮圈の大局に眼を注ぐならば、無制限なる自由を與へることは決して所を得しめることではない。むしろ日本人と比較して、その素質に於て甚だしき懸隔を認めた結果に外ならない。甚だしい懸隔があるから、獨立の責任を與へて自らの向上を圖らしめ、眞に彼等の傳統に生きる道を得しめんとするのが、近時の共榮圈に於ける「國生み」の實體である。より高次の內地人と等しい實力を持つものはむしろ獨立の必要なきもので、獨立の必要なきことはむしろ喜ぶべきことであるといはなければならない。かうした點に於ては尙ほ半島の青年達に十分共榮圈の實體が理解せられて居ないのである。

今日朝鮮に於ては、既に述べた志願兵制度より躍進した徴兵制度の問題、及び皇國民としての實力を更に强化する爲の義務敎育制度が存し、軍事並びに經濟的方面に於ては、大陸に於ける戰力培養基地としての半島の確立といふ大なる問題がある。先に咸鏡北道に於ける重化學工業の現況に就いてはその一端に觸れたが、將來平壤周邊を中心とする工業の實力は、大陸に於ける戰力增强に大なる役割を果たすものであるし、皇國の食糧問題或は衣料問題に關する半島の責任も非

常に重大化したものといはなければならぬ。從來は、ともすれば內地製品の消費地の如き觀を呈した半島は、今や大陸に於ける戰力培養基地として、滿洲國と不可分一體の關係に置かれつつあることを、われわれは充分認識しなければならない。

交通路の觀點に於て、或は空軍基地の問題に於て、重工業並びに輕工業の問題に關して、最近の半島は支那事變前の半島とは全く異なつた意義と責任とを持つものであることを考へ、その責任を果たすべき半島同胞の教育問題に關しては、內地人は更に一段の反省を要するのではあるまいか。心からなる一視同仁の態度なくしては、內鮮一體といふが如きは單なる空念佛にすぎず、今後幾多の難問題を招來せざるを得ないと考へられる。

本年度より、總督の發意によつて半島に於ける官吏の再教育が京城を中心として大規模に行はれようとして居ることは、このやうな狀況下にまことに適切な施策といふべきである。

こゝに、大東亞共榮圈建設の根基が人にあり、大東亞共榮圈建設の長計は、要するに民を化し俗をなす遠圖に存するといふ『新論』の所說の正しいことを痛切に感ぜざるを得ないであらう。神國日本の確信と誇りとを、わが國民の一人々々が抱くやうな教育錬成の行はれることによつて、以上述べた如き共榮圈建設の確乎たる地盤が作られることを私は確信するものである。

第五章　皇國の使命と現代教育の反省

一、指導者たる者の心構へ

皇國史を繙くに　神武天皇の御代以來しばしば國民が積極的に海外に發展した時期がある。併し乍ら今回の如き大規模なる發展は史上未だ嘗てない盛事であつて、第一線に働いて居るものにとつて今度位働き甲斐のあることはないと考へる。從來の海外發展は、國民のうちの或る部分に限られてゐたり、國の一部では海外進出に反對するものがあつたり、貿易に赴いた地方で必ずしも日本人を喜び迎へなかつた場合が多い。卽ち、今次戰爭に於ける如く國の總力を擧げ、國民の誰一人として海外進出に反對するものなく、又皇軍のおもむく所多年原住民を壓迫してゐた米英蘭等暴慢な敵國人共は驅逐せられ、新秩序建設は是非共日本人に俟たねばならぬとして喜び迎へ

てゐる事實は嘗てみざる快事であり、これこそ深遠なる皇謨の具現なのである。

併し乍ら、それだけに我々日本人の責任は從來とは比較にならぬ程重大である。玆十餘年の間、歐米諸國の日本に對する壓迫の下に、國民の海外發展は抑止せられ、自然海外に出る日本國民の數は限られ、外地勤務の經驗者の數は至つて乏しく、皇國の代表者として異境にある心構へを練る機會にも惠まれなかつたのである。然るに、支那事變以後急激にその機會が開け、有爲の青年は陸續として海外に渡航することになつた。しかしそれらの人々も仕事に關しては充分の能力と心構へはあつたとしても、皇國の代表者として異境の人に接する用意は必ずしも十分出來てゐたとはいへない。

風俗や習慣や言語の異る人達に接するには色々の心の準備がなければならないが、就中何よりも大切なことは至誠を以て接すれば、必ずわが眞意が通ずるものであるといふ信念を持つことである。そのやうな信念を得るには皇國の傳統卽ち歷史を知る必要があると思ふ。

世界には、日本の文化は古くは支那文化の影響によつて作られ、近くは近代歐米文化の力を藉りて進んだものと簡單に考へてゐるものがないではないが、このやうな考は思はざるも甚だしいものである。國學者が儒學者の過ちを批評して、「支那で道をやかましくいふのは道が行はれてゐないからである。日本では古くから道が存するから、ことごとしく道を說かないのである。」といつたことがあるが、この言葉は實に立派な批評である。日本に傳統として存在する斯の道――ことごとしく道といふ言葉ではいはない道こそ、嘗て支那文化を生かし、近くは近代歐米文化を消化する力であつた。日本人の精神と國體が支那文化や歐米文化といふ食物を消化しこれを吸收したのである。牛肉や野菜や水が胃や腸で消化せられると、その一部分が養分となつて血や肉を形成するが、血や肉は決して變質しないのと同じく、日本は支那文化や歐米文化によつて決して元の姿を變へてはをらない。そこに日本の傳統の力强さがあるのである。支那や印度が古い文化を持ちながら、久しく歐米に膝を屈したのと比較すれば、この間の事情は十分に分る筈である。日本人と支那人、日本文化と支那文化とを混合することを日華合作、日支親善と考へてゐる向があるやうであるが、このやうな考へ方は日本の傳統に對する自信がないことから來る場合が多い。支那人をあくまで支那人らしく、フイリッピン人を眞正のフイリッピン人、ビルマ人を眞のビルマ人に立ち直らせるために、日本のもつ優秀なる文化を惜しみなく與へても、尙ほどこまでも日本が大東亞の中核たり得ることを信じないところから、右に述べたやうな考が生まれるやうに思はれる。惜しみなく與へるのが古來王者といはるゝ人である。物欲し顏で反對給付を豫期する時

は必ず思ふやうな結果を得ることが出來ないものである。いくら與へても與へる方が優位を保ち得るといふ自信の上にのみ、大東亞共榮圏はうち立てられるのである。

歐米文化を熱心に追求してゐる頃、日本から海外に出た人が、日本の歷史や文化についての質問に答へられず恥づかしい思ひをしたといふことを屢々耳にする。大東亞共榮圏の指導者として建設をなしつつある今日の在外同胞は、苟も過去のこのやうな恥辱を繰返すことは許されない。己れを知らざるものは眞に自信を持ち得る筈はない。史上對外關係が活潑で、日本人の勢力が伸びて居た時には、國民は皇國の歷史に通じ、皇國についての自信に滿ち、從つて行ふところは王者の風格があり、外國人の尊敬を受けてゐる。聖德太子が攝政を遊ばされてゐた頃は、わが國威が頓に輝いた時期であるが、太子は新たに冠位をお定めになる際、十二階の位階の最高を大德と名付けられてをる。德に次いで大小の仁禮信義智があり、都合十二階となるのである。德を仁禮信義智の上に置き給うたことは頗る意義が深い。太子の薨去せらるゝや、太子に佛典をお敎へ申した高句麗の僧惠慈は、「恭二敬三寶一救二黎元之危一是實大聖也。今太子既薨之、我雖二異國一心在二斷金一、某獨生之有二何益一哉。」とその御德を讃へて居る。

これより先、半島各地に內亂が起り、その地の住民が數多內地に歸化して居るが、この人々は何れも平和なわが國土を憧憬れて移住したと古い記錄に見えてゐる。　嵯峨天皇の弘仁六年今から一一二八年前に出來た『新撰姓氏錄』を見ると、姓氏の由來する祖先により、神別、皇別、蕃別に分けてある。卽ち天神地祇より分かれ出たものを神別、　天皇皇子から分れたものを皇別、近隣諸國に祖先を有するものを蕃別として居る。總數一千一百八十二氏の中、蕃別に屬するもの三百二十六氏、全體の三割に達し、何れも皆立派にすめらみたみとして神別、皇別の民と何らの差別なく待遇せられ、安らかな生活を營んでゐたことが分かる。卽ち　天皇陛下にお仕へ申し、日本文化に歸一するものは何れも皆忠良なる臣民たり得ることを歷史が立派に證明してゐる。このやうな時期に日本人は特に德を重んじてゐることを我々は心に止めるべきである。

次に國民が盛んに活躍したのは八幡船が大東亞圏の各地に出沒した時期であるが、當時フイリッピンに居た日本人のことをモルガといふ人が評して、

彼等は元氣あり、性質善良、且つ勇敢なる種族である。態度、風采、ともに高貴なる民族であり、種々の禮儀作法を有し、名譽と社會的位置を重んずること甚だしく、しかして、いかなる危險の場合に臨むも、確固たる決心を有す。

といつてゐる。德川期の初め、最も南方との通商が盛んだつた頃、貿易に從事して有名であつた

角倉了以は、安南やシャムに大活躍をした九艘船の總監司卽ち總元締であつたが、この人が安南に仕向ける船團に對して次のやうな船中規約を作つてゐる。有名な學者藤原惺窩の代筆したもので、

一に曰く、凡そ貿易は有無を通じて人と己とを利するもの、人を損ひて己を益するものにあらず。利を共にすれば小と雖も大なり。利を共にせざれば大と雖も小なり。所謂利とは義の嘉令なり。

二に曰く、異域の我國に於ける、風俗言語異ると雖も、その天賦の理は未だ嘗て同じからずんばあらず。その同を忘れその異を怪み、少かたりとも欺詐慢罵すること莫れ。彼れ且らく之を知らずと雖も、我れ豈之を知らざらんや。信は豚魚に及び、機は海鷗にあらはる。唯だ天は僞を容さず。欽んで我國俗を辱しむべからず。若し他の仁人君子を見なば、則ち父師の如く敬ひ、其國の禁諱を問うて、其國の風敎に從ふべし。

三に曰く、上堪下輿の間、民胞物與一視同仁たり。況んや同國の人をや、況んや同舟の人をや。患難疾病凍餒あらば、則ち同じく救ひて、苟くも獨り脫せんと欲すること莫れ。

四に曰く、狂瀾怒濤險なりと雖も、また人欲の人を溺らすに若かず。人欲多しと雖も酒色の尤も人を溺らすに若かず。到處同道の者、相共に匡正して之を誡めよ。

五に曰く、瑣碎の事、別錄に記して日夜座右に置き、以て鑑みよ。

今日海外に働くものにとつても又その規約とするに足るものであらう。

幕末に日本に來た英國人の記錄を見ると、遣歐使節に對する經費の問題について、一向に通商條約を遵守せぬにも拘らず、「かゝる金錢關係に於いて日本政府の所約に絕對の信賴が置けることは甚だ奇妙であるが、併し本職は未だそれが破られた例を知らない。」と他の東洋人と比較して日本人の信義に厚いことをいつてゐるのを思ひ合せ、日本人の傳統、そして他國人をして敬服せしめる點が古今を通じて、至誠、信義、恥を知る等の點に存したことが分かる。近くは江北の聖者張謇に對する駒井德三氏の至誠が、二十年後の今日豐かに稔り、今や支那建設の範を垂れようとしてゐることは旣に述べたところである。在外同胞が國史のこのやうな光に對して德を積み、至誠を以て現地人に接し、惜しみなく王者の德を與へるならば、國史の光は愈ゝ輝き、共榮圈建設の基礎は益ゝ固まることであらう。言葉の通じない人々に對して私共の眞意、卽ち日本の本心を知らしめるには、行爲あるのみである。以上、國史に照らして如何なる行爲をなした場合、最も陛下の大御心を暢べ得たかを略述したのであるが、至誠を以て接し、王者の德を惜しみなく與へ

る行爲が、やがて輝しい大東亞共榮圏を創るものであると結論せざるを得ない。行爲を以て日本の眞意を、そして眞實の姿を明らかにせよ。「國史の光」は實にこのやうな大道を昭々乎として照らし示して居るのである。

亞細亞の指導者たる日本人に望ましい今ひとつの心構へは皇國傳統の護持といふことである。

支那事變以前は、日本の傳統的精神が國民の一部に傳はつたのみであつて、老ひも若きも歐米文化の糟粕を嘗めて怪しまざる風潮が漲つて居つた。蘆溝橋の一彈は斯樣な妖雲を劈き、傳統日本への道を打開し、好むと好まざるとを問はず、皇國の傳統護持の爲に生死の關頭に立つことを餘儀なくしたのである。今や生死の境を彷徨する青少年の間には、自らわが國の傳統的なる精神が甦り初めた。支那事變を通じて大和魂の錬成が續行せられ、更に大東亞戰爭が勃發して、世界の二大强國たる米英を正面の敵とするに及んで、愈々その本然の日本人の魂を發揮するに至つたことは、寔に喜ばしき限りである。

皇軍の比類なき强味は、國體に隨順し　天皇歸一の信念に生きることに外ならないが、このことが最も端的に現はれるのは死生觀に於てであるといへよう。生死の問題は、人生にとつて最も重大な問題であるから、古來世界中の人々が數千萬言を費してゐる。又、單に多くの言葉を用ひたといふだけではなく、おのがじし眞面目な態度でこの問題に臨んでゐる。宗教、道德は無論のこと、哲學や文學さては歷史物語にも生死を論じたものは頗る多い。史上美談として殘る話題が、主として死にかたの善惡にかゝつてゐる點も、世界何處においても一致するところである。

併し皇國ほど生死の問題が歷史の正面に現はれてゐる國はなく、生死の問題が生に重點が置かれずして、死の尊さを讃へてゐる例は外國に類例がない。基督教における昇天の思想、佛教における成佛觀は、死後の世界についての思想ではあるが、死後においても、生前にも增した安樂な世界の存するやうにとの希望を現はしたものであつて、天國といひ、極樂淨土といひ、生を樂しみ、物欲を滿足せんとする人間の欲望とつながるものにほかならない。

このやうな死生觀は到底日本人の傳統的な死生觀と時を同じうして語るべきものではない。勸善懲惡の思想と、生への執着とは基督教や佛教の死生觀に却つて濃厚であつて、天國とか極樂とかいふ考で空想せられた世界は、美しいには相違ないが、現在ばかりの世界であつたり、死は何處となく消極的な暗いかげをもつものである。

わが國における傳統的死生觀はそれとは非常に異り極めて積極的な明朗さを持ち、人生に死は

ないといふ大悟に徹底してをるのである。大和魂、武士道、至誠、忠孝の極まるところに必ず死が考へられ、肉體の滅亡によつて永遠に生きるものとの確信に滿ちてゐるところ、外國にその例を見ない力强さがある。

國民齊しく愛誦する宣長の歌に、

敷島の大和心を人問はば朝日にほふ山櫻花

といふ名歌がある。大和心を櫻花になぞらへたものであるが、古來日本人は死際に未練なきことを尊ぶ。櫻については山田孝雄博士が『櫻史』一卷をものされ、櫻についてのくさぐさの物語と歷史とを記して居られるが、支那人が牡丹を愛し、西洋人が薔薇を好み、日本人が櫻を賞でる心の奥底に、死生觀の相違が明らかに見られるやうに思ふ。「立派な最期」「死花を咲かせる」「散華」などいふ言葉を通じても端的に日本人の死生觀が窺へる。わけても古來大和心は三十一文字の敷島の道によく表はれてゐる。辭世の歌といはず、すべて和歌にこそ、就中傳統的なる死生觀の歌はれたものが多い。大伴氏の家訓として傳へられた、

大伴の　遠つ神祖の　其の名をば　大來目主と　負ひ持ちて　仕へし官　海行かば　水漬く屍　山行かば　草生す屍　大皇の　邊にこそ死なめ　顧みは　爲じと言立て　大夫の　清き

彼の名を　古よ　今の現に　流さへる　祖の子等ぞ

といふ有名な長歌こそ、日本人の死生觀を明らかに示したものといへよう。著名な歌を史上から拾へば、防人の歌

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

はじめとして數限りなく死生觀が歌はれてゐる。

死生觀といへば誰もが思ひ出す『葉隱論語』の

武士道といふは、死ぬ事と見付けたり。二つ〳〵の場にて、早く死ぬ方に片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわつて進むなり。圖に當らぬは犬死などといふ事は、上方風の打上りたる武道なるべし。二つ〳〵の場にて、圖に當るやうにするは及ばぬ事なり。我人生くる方が好きなり。多分好きなり。多分好きの方に理が付くべし。若し圖にはづれて生きたらば腰拔なり。この境危きなり。圖にはづれて死にたらば、犬死氣違なり。恥にはならず。それが武道に丈夫なり。毎朝毎夕改めては死に死に常住死身になつて居る時は、武道に自由を得、一生落度なく、家職を仕果すべきなり。

との教と相通ずるものである。平出大佐の放送にあつたやうに、敵艦隊の探索に出た若き海の荒

鷲が、目的を果し歸り得るかつがつのガソリンを殘すのみとなつた時、任務終了の故に基地に還るか、任務外ながら二つの目で確認した敵艦に僚機を誘導するかの岐路に立ち、敢然後者の道を選んだ事實、眞珠灣の攻撃、ガダルカナル、アッツの敢闘、さては山本元帥の戰死、何れも葉隱の根本義に通じ、防人の歌、大伴家の家訓と相通ずることを痛切に感ずるのである。古今に通ずる日本人の死生觀はこの二、三の例を以ても明らかであらう。

肉體の滅ぶことによつて、魂は永遠に生きるといふ日本人の死生觀は、どうして生まれたのであらうか。明朗にして積極的なる死生觀が、獨り皇國にのみ輝く理由は如何。一言を以て盡すならば、萬邦無比の國體に淵源するものと斷じて然るべきである。忠孝一本、家名を汚さざることが、やがて國に盡すことであり、大御心に副ふ所以であるところに、喜んで死地に赴く心境が培はれる。己一人死すとも子孫が己の志を繼ぐとの確信と安心とがあつて、始めて躊躇なく切腹を斷行し得るのである。楠公の遺訓と傳へられる文章に、

某今度討死せば、天下は尊氏掌握せむ。然りとて家を立、命を助らむ爲に彼に降參して、父が一生の忠烈を捨つべからず。玉は碎けても其白を改めず、竹は焚ても其節を毀たずといへり。汝能く思ふべし。其爲に一族郎徒あまたの人々の附置ぬるうへは朝敵寄來るとも何の煩らはしき事か有らん。降參不義の行跡あらば、大國あまたの主となりて、家畜榮ゆとも何かせむ。不義の富貴は大なる恥とせり。上へ對し奉り、後めたき行ひ毛頭有るべからず。是を愼むをもて汝が孝行の第一とすべし。

とあり、この志を繼いで決戰に臨む正行は辭世の歌として、

かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる

と詠んでゐる。これぞ神州不滅の確信であり、死に就くこと歸するが如き日本人の心境がよく現はされてゐる。

神州不滅といへば、吉田松陰の留魂錄と絶命之辭とを想起する。曰く、

今我爲レ國死。死不レ背二君親一。悠悠天地事。照覽在二神明一。

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

魂の不滅と共に、神州の不滅を堅く信ずる志士の心は、眞木和泉の辭世の歌

大山の峰の岩根に埋めにけりわが年月の大和だましひ

や、數多い平野國臣の歌の中に、

あだなりと人はいふとも山櫻散るこそ花のまことなりけり

大王にさゝげあまし〻わが命今こそ捨つる時は來にけれ
大丈夫の心の花は咲きにけり散りても四方に香は　ひつつ
ものゝふの思ひこめにし一筋は七代かゆともよし撓むまじ

等と詠はれ、楠公の七生報國の精神は、明治維新史に脈々と波打つを見る。勤皇の歌人佐久良東雄もまた、

君がため命死ぬべきますらをとなりてぞ生ける驗ありける

と歌んだが、日本人の死生觀の根本を流るゝ信念は、橘曙覽の

天皇は神にしますぞ　天皇の勅としいはゞ畏みまつれ

吉田松陰の

かけまくも君の國だに安からばみを捨つるこそ賤がほいなれ

等の詠に見られる精神に他ならない。國民哀悼の中に、永へに生きる山本元帥の御魂も、實に數千年の傳統に培はれたところであり、生前殊に萬葉集に親しまれた床しい心こそ、時に臨んでは比類なき勇斷決意を生み、平然死地に赴く泰然自若たる面魂を作つたのである。萬葉の精神が元帥の詠草に生きてゐることは、われらをして愈々神州不滅の信念を固めしめると共に、日本人の死生觀が古今を通じて動かざるところを感得せしめないではおかない。元帥は

人の世に立たむ敎はあまたあれど誠一つのほかなかりけり
國を負ひて向ふきはみ千萬のいくさなりともことあげはせじ
たぐひなき勳を樹てし若人はとはに歸らずわが胸痛む
燃えくるふ焔を浴みて艦橋に立ちも盡きしかわが提督は
海の子の雄々しく踏みて來し道に君たちつくしつ神上りましぬ

等と詠じて居られるが、この司令長官の精神は實に海國男兒總べての心を代表するものである。日本人の傳統的な死生觀は今や戰さの庭に臨む若人達の心に、意識すると否とに拘らず充ち滿ちて居るのである。大東亞戰爭はこの精神によつて勝ち拔かねばならぬものであり、亞細亞復興の大業はこの精神の確把によつてのみ完成されるのである。

二、「家」の　敎　育

決戰下の今日、國民齊しく戰力の增强に全力を傾倒すべきは論を俟たぬところであるが、もの

には順序本末がある。人の營みは、たゞ眞面目であり、誠實であり、精力を盡せば事足るといふものではなく、進むべき方向となすべきことの順序を吟味し、反省しなければならぬ。歐米の學問、思想、文化を尊しとする心は、大東亞戰爭の勃發とともに、痛烈なる打擊を被つたけれども、戰爭の長引くにつれて、よりを戻す惧れがある。昭和十六年十二月八日以來、しばらく鳴りをひそめてゐた思想家や學者の論說が、國家主義の擬裝よろしく、隨所に巧緻な表現と複雜な論理の綾を以て、登場しはじめた。研究や論議の對象を、國家や戰爭や大東亞などに擇んだからといつて、戰力の增强になるわけのものでもなく、目先きの增產にのみかゝづらはることも、また、必ずしも喜ぶべきことであるとはいへない。第一章に會澤正志齋先生の『新論』を引用し、先生は論ずるに當つて「國體」「形勢」「虜情」「守禦」「長計」の五章を立て、「國體」の章には、神聖と忠孝とが國體の根本であることを論じ、武を尙び民命を重んずる所以に說き及び、「形勢」の章には、四海萬國の大勢を論じ、「虜情」の章には、戎狄の覬覦する情實を論じ、「守禦」の章には富國强兵の要務を說き、「長計」の章には、民を化し俗をなすの遠圖を論じて居られることを紹介した。蓋しものを考へ、策を建つるにあたつての本末乃至は順序、或は着眼點を明示されたのであつて、今日に於ても先生の炯眼に敎へられるところが少くない。目下重大問題として論議せられて居る戰力增强の問題を考へるに當つても、また、國體、形勢、虜情、守禦、長計の五つの點から吟味することが必要である。

由來わが國は、武力の點については、萬邦に比類なく、戰場に立つた場合は、自覺すると否とに拘らず、日本人本然の面目を發揮する不思議な特性を有してゐるが、銃後の生活にあつては、必ずしも武の奧義に達する如き姿が見られないやうに思ふ。思想戰についていつても、無防備とはいはざるまでも、防備嚴重なりと誇り得ない。キリスト敎に基づく世界新秩序の建設を目標とするアメリカの思想戰が、刃を磨ぎすまして圍繞してゐる現狀を見るにつけても特に國體の護持、米英が皇國を覬覦する情實、富國强兵の具體策、民を化し俗を成すの遠圖長計等を深く省察することの必要を痛感せざるを得ない。軍需物資の增產、輸送體制の整備をはじめ、萬般の戰力の基礎は、かゝつて人にあり、軍事訓練、各種の錬成、再敎育等を强力に實施することは、もとより缺くべからざることである。戰力に直接關係の深い軍事技術、防空技術の演練はやゝ軌道に乘つたやうであるが、眞に求められる戰力の增强は、單なる技術の修得を以ては期待し得ない。更に徹底した精神敎育こそ、もつとも切實なる要求であるといふべく、この際一段と思ひを國體に馳せ、萬國の形成、虜情、守禦、長計にめぐらさねばならない。

現在のドイツに缺くことの出來ぬ智能、ハウスホーファ教授はその名著「大日本」で戰力、すなはち國防的性能について次の如くのべてゐる。

我が國の勇敢な老武人たちが創痍を撫しながら、「教育の方法によつて一切の國防的性能に對する確乎たる基礎が置かれねばならぬ。新兵はそれを持つて軍隊に入り來るのである。」と叫んだのは機宜を得たものであつた。國防的性能とは次の如きものである。第一、自己抑制、自發的服從、勇氣、周到なる決斷、不撓不屈の意志等の精神的性能。第二、巧みなる調整と柔軟な運動を伴ふ緻密なる全筋肉系統。第三、强い心臟と抵抗力に富む肺臟。第四、鋭敏な眼、――以上、國防的能力に必要な諸々の性能は、早くから體操、遊戯、散歩、游泳、漕艇、氷滑、登山等の身體活動によつて――學校の手で行はれると生徒の休養生活として行はれるとに論なく――獲得し得るものといはれてゐる。しかし、學校のみの努力を以てしては、もはや我々が必要とするところのすべてを成し就げることは出來ない。

かうした戰力は、日本の場合は軍隊に入る以前に、家の生活、日常生活の中に用意せられるとて、教授は詳細に具體例を示しつつ說明を加へてゐる。そして日本人の生活の、西歐の同一の社會層よりも進んでゐる諸點を要約して、

一家族一家屋、通風の好い清楚な建物、各戸に附屬する庭、日々の沐浴、入口で履物を脱ぐ習慣、山野の跋涉、頸部の露出、脚部及び腕の露出、寬服、堅い布團、堅い枕に眠る風習、しばしば二、三歲にいたるまでの母乳哺育等々。

であると述べて居る。右は軍隊生活の基礎をなす生活の修錬が、健全なる國民生活の間になされる點を指摘したのであるが、戰力の根本は、先に引用した如く、自己抑制、自發的服從、勇氣、周到なる決斷、不撓不屈の意志等の精神的性能である點に私たちは留意すべきであらう。

軍人に賜はりたる勅諭にも、

一　軍人は忠節を盡すを本分とすへし
一　軍人は禮儀を正しくすへし
一　軍人は武勇を尙ふへし
一　軍人は信義を重んすへし
一　軍人は質素を旨とすへし

の五ヶ條を諭し給ひ、

右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからすさて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ

抑此五ケ條は我軍人の精神にして一の誠心は又五ケ條の精神なりと仰せられた。この勅諭を日夜奉讀して、行住坐臥これが體得に精進してゐる皇軍の戰力は、隨つて、肉體的なるものよりは、むしろ精神的なるものに負ふものであることが明らかである。しかして、このやうな精神力の修錬は、入營後に期待し得るよりも、入營前の學校教育に、さらに家の生活によつて、無意識の間に行はれてゐるのである。すなはち、皇軍戰力の錬成道場は家にありと論斷して憚らぬのである。

『葉隱』の中に、

男子の育て樣、先づ勇氣をすゝめ、幼稚の時より親を主君に准じ、不斷の時宜・作法・給仕・口上・堪忍・道歩みなど迄、仕習ひ候樣いたすべし。古老斯くの如く致され候由。無精に候時は叱り候て、一日も食をくはせ申さず候。これも奉公の稽古にて候。

とあるが、このことは只單に過去の敎でなく、今日に於ても座右の銘たり得ると思ふ。

古來人物の眞價を知らんとすればその人の母を見よといはれてゐる。このことは、諸々の戰力の基礎たるべき人の作られるのが、家の敎育に存する所以を、端的にいひ表はしたものであつて、近くは大東亞戰爭に散華せる軍人の母、遡つては維新の志士に、その顯著なる例を見出すことが出來る。たゞに母ばかりではなく、盡忠奉公の誠をもつて著聞する人々の妻の內助の功もまた沒し難い。けだし、二六時中家にあつて子弟を敎育するもの、或は苦しい家計を切り盛りして夫をして後顧の憂ひなからしめるものは妻であり、國の傳統を傳へ、家の傳統を繼がしめる上に婦人の占める役目はすこぶる大きい。隣組や婦人會や防空を通じて、戰力增强に寄與する婦人の役割も輕視し得ないが、家の生活を通じての戰力培養に比すれば、前者の比重は必ずしも大なりとはいへない。昨今の如く、日常物資の入手が困難となり、物價の昂騰による生活難が加つた時にあつては、恰も明治維新前後の如く、婦人の責任は倍加し、したがつて、その眞價を極度に發揮することが求められてゐる。吉田松陰先生の生涯は、今日の青年にいろいろな敎訓を垂れてゐるが、先生の傳記を繙いて、もつとも感銘深い場面は、愛弟子に背かれ、己が誠の足らざることを反省して絕食を斷行した時、母が書翰を以て斷食を中止することを忠言したところである。

一寸申參候。そもじ樣いかゞ御くらし被成候や。さきほどにふりよの事、うす〳〵みみに入、あまりきづかわしさに申進じ參候。きのふよりは御食事たちとか申事のよし。おどろき入り候。萬一それにて御はて被成候ては、ふこう大一口おしきしだいにぞんじ上候。はゝ事もやまいおふくよわり居、ながいきはむつかしく、たとへ野山やしきに御出候ても、御ぶしに

さへこれ有候へば、せいになり力になり申候。たゞたんりよ御やめ、御ながらへのほどいのり參候。此品わざ〳〵ととのへさし送り候間、はゝにたいし御たべ賴み參候。いくへも〳〵心御入れかへ、かへす〴〵もいのり參候。めで度かしこ。

切々たる母の愛情が行間に溢れてゐる。杉家に嫁して以來、貧苦をいとはず家政を處理し、身をもつて孝行の範を示し、勤勞勉勵の家風をつくつた瀧子母堂こそ、軍人に賜はりたる勅諭に敎へ給ふ忠節、禮儀、武勇、信義、質素の德を松陰先生に體得せしめる大なる力であつた。これに答へる先生の心は、刑死の期近きことを感じて詠じた次の歌にうかがはれる。

親を思ふ心にまさる親心けふの音づれ何ときくらん

兩親に對する無限の思慕の念が、忠義の志と一如の姿で示されてゐることを見逃すことが出來ない。

また、井伊大老要擊の水戸十七士の中に加つた薩摩武士有村治左衞門兼淸の母は、子弟の敎育に特に心を碎いた人として名高いが、その兼淸に與へた書翰に

まづ〳〵無事候。左右目出度ます〳〵げん氣にて出勤申され候よし、この上なくかず〳〵めで度存參候。この地何も相替り候事なく、皆々げん氣にくらし、少しも〳〵御けねん被成間敷候。身は日にそいつよく相成、何も御心安かれと存上候。扨江戸おもて何かと六ケ式よの中と相成との事、とかく事にのぞみて候せつは、一寸もひかぬと申され候事はよく承候。うれ敷存參候。

雄々敷も君に仕ふるもののふのはゝてふものはあはれなりけり

一時のけたい、まつ代の名となる。よく學び玉ふべし。からだは大切にいたさるべく候。武運長久を祝ひ、かつ男武しおくりしんぜ候。めでたくかしこ。

とあるを見れば、兼淸の弟雄助が居宅にて死を賜ふとき、親戚の家に立退くことを拒み、子息のために手づから各室を掃き淸め、香を炷き、花を挿し、切腹の間を飾り淸め、

同じく國の爲め命を捧げて辛酸を嘗めた武士達の中にも、不幸にして酷き幕吏の手にかかり、久しく牢屋の恥を受け、刑場の露となつた者もある中に、今かく武士の格式をもつて切腹仰渡されること、此上なき身の冥加といふべきもの、母は御身のみならず、二人の男兒相並んで死に就くも義に依り國の爲めに仆れるとならば何をか惜しみ何をか歎かん。母に心を殘さずして、天晴れ美事の死を遂げよ。

と、說き勵ましたと傳へられてゐるのもなるほどと肯ける。藤田東湖先生の妻、都を遠く離れた

土佐の地にあつて、『萬葉集古義』の大著をなし得た鹿持雅澄の妻、梅田雲濱の妻などは、貧困と闘ひながら夫をして大志を全うせしめ、或は死後もなほ夫の魂の中に宿つて、夫を鼓舞激勵したことをもつて聞えてゐる。我々はこのやうな物語をたゞ昔物語とのみ聞き流してはならぬ。支那事變や大東亞戰爭の間に、右と同樣の實話が數限りなく存することを知るからである。神州不滅の信念は、かうした點から力强く與へられるのである。皇國の傳統の維持は家によつて、母によつて果され、無窮の戰力が家によつて育まれつゝある現實に心をうたれるのである。大正の頃、家憲、家訓、家風の遵奉、家寶の尊重等は、封建的遺風として輕蔑せられたが、このやうな風潮は歐米風文化を尊重する心の產物に他ならない。今こそ、戰力增强の素地として、祖先の遺風が如何に貴きものであるかを想ひ、家名を失墜せざらんとするわが國の醇風美俗をいよいよ發揮しなければならぬ。先に掲げた有村蓮子の書狀に、「一時のけたい、まつ代の名となる。よく學び玉ふべし。」とあるのを再び省察すべきである。

家に於ける美德の婦人と、密接不可分の關係にあるは孝子である。尊皇攘夷を旗印として、尙武の聞え高い水戸學をもつて、偏武の學なりと誤解する輩は、よろしく水戸學の中心人物の孝心を回顧すべきである。かの『弘道館記』を見るに、

吾ガ祖威公實ニ封ヲ東土ニ受ケ、夙ニ日本武尊ノ人トナリヲ慕ヒ、神道ヲ尊ビ武備ヲ繕ム。義公繼述シ、嘗テ感ヲ夷齊ニ發シ、更ニ儒教ヲ崇ビ倫ヲ明カニシ名ヲ正シ、以テ國家ニ藩屏タリキ。爾來百數十年、世々遺緒ヲ承ケ、恩澤ニ沐浴シテ、以テ今日ニ至ル。則チ苟モ臣子タルモノ、豈ニ斯ノ道ヲ推弘シ、先德ヲ發揚スル所以ヲ思ハザルベケンヤ。此レ則チ館ノ爲メニ設ケラレタル所以ナリ。抑モ夫レ建御雷神ヲ祀ルハ何ゾ。其ノ天功ヲ草昧ニ亮ケ、威靈ヲ玆ノ土ニ留ムルヲ以テ、其ノ始ヲ原ネ、其ノ本ニ報イ、民ヲシテ斯ノ道ノ緜ツテ來ル所ヲ知ラシメント欲スレバナリ。其ノ孔子ノ廟ヲ營ムハ何ゾ。唐虞三代ノ道、此ニ折衷スルヲ以テ、其ノ德ヲ欽ジ、其ノ教ヲ資リ、人ヲシテ斯ノ道ノ益々大ニ且ツ明カナル所以ノ偶然ナラザルヲ知ラシメント欲スレバナリ。嗚呼我ガ國中ノ士民夙夜懈ラズ、斯ノ館ニ出入シ、神州ノ道ヲ奉ジ、西土ノ教ヲ資リ、忠孝二无ク、文武岐レズ、學問事業其ノ効ヲ殊ニセズ、神ヲ敬シ儒ヲ崇ビ、偏黨アルコトナク、衆思ヲ集メ、群力ヲ宣ベ、以テ國家無窮ノ恩ニ報イナバ、則チ豈ニ徒ダニ祖宗ノ志墜チザルノミナランヤ。

とある。弘道館に於ける子弟の教育の重點は、祖宗の志を繼承せしめるところに存し、日本武尊の人となりを慕ひ、建御雷神を祭る精神は、文武不岐にあつた。尙武の精神の高揚は、武士たる

ものの本分であるが、武は同時に限りない慈悲慈愛の心を基とする皇武に他ならない。弘道館に皇大神宮を祭らないのは、文を輕んずるからではなく、臣子が直接天照皇大神宮を祭るは、國體に悖るおそれありとの配慮より出でたものに他ならぬ。日本武尊の人となりは記紀の所傳の示す如く、怒れば鬼神をしてさけしめる逞しき威武を發揮するが、一面には御父　景行天皇に對する御情誼まことに厚く、人に臨むや、深き情愛をもつてせられたことが知られる。この御人となりを敬慕することが水戸學の精神であり、「學問事業其ノ効ヲ殊ニセズ」とある如く、幽谷、東湖、正志齊先生、或は岡井蓮亭等の藩民に對する思ひやりもまた、徹底して居た。小藩である上に、佐々氏の殘黨を鄕士として取扱つた水戸藩が、民政上特に見るべきもの多く、他藩に例なく平穩であつた點を見逃してはならぬ。深い愛情と徹した孝心が、激しては攘夷論や排邪論となるが、本來は慈愛に發するものである事實に留意することが必要である。義公德川光圀の孝行は、母堂の葬送に際して端的に見られる。母堂が日頃法華宗を信じてゐたのにちなみ、甲州身延山の住職日奠を招いて法號を久昌院と定め、みづから遺骸に附添ひ、その後も喪に服し、追善のために法華經を手寫し、慈母を記念するため、遺骸を水戸家累代の墓所たる瑞龍山に改葬し、附近に久昌寺を建立してゐる。東湖先生が安政二年の大地震に、老母を救ひ出してみづからはそのために壓死したことは、先生の孝心を如實に示したものとして著名である。

近時の錬成や訓練が、動もすれば團體行動のための訓練に偏し、ために被教育者の間に他に依存する弱い心を起さしめ、家の教育の價値を認めるにこと缺いてゐる點を見聞するにつけて、水府の教學が忠孝一本に貫いてゐることを思はざるを得ない。人生のありのまゝの飾り氣のない生活と、長幼の序と愛情と信頼によつて成り立つ家と同じ雰圍氣をもつて全世界を被はんとすることが皇國の理想であるといへるだらう。忠孝一本をもつて國體の本義とする所以はこゝに存する。古來、忠臣は孝子の家より出づると稱せられてゐる如く、戰力の根基は家に存するのである。「武士たる者は、忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲とを片荷にして二六時中、肩の割入る程荷うてさへ居れば、侍は立つなり。」と『葉隱』にあり、『士規七則』に「人君民を養ひ、以て祖業を繼ぐ。臣民君に忠に、以て父の志を繼ぐ。君臣一體、忠孝一致は、唯吾國のみ然りとなす。」とある。皇國に於ては、財產相續よりも家督相續の方に重きをおいてゐることに深い意味があることを思はねばならぬ。

すめろぎにつかへまつれと我を生みし我が垂乳根は尊くありけり

といふ佐久良東雄の歌は、家を考へることなくしては、皇國の道の繼承の存し得ざることを物語

つてゐる。皇國の軍人が萬邦に比類なき武威を具へてゐるのは、肉體の死によつて、魂は永遠に生きると信ずる死生觀によると考へられるが、このやうな死生觀もまた祖孫一如の家の傳統によつて培はれたものに他ならない。

昭和十八年五月二十八日附戰死を發表せられた殊勳甲金盛良治大尉の遺稿『軍人勅諭衍義』の一節に次の如くある。

皇國ノ理想トハ……天皇ト蒼生ト一ツ心ニナリテ、祖宗ノ御精神ニ添ヒ奉ルコト、卽天地ノ無窮ニ榮エユクヲ見テ、共ニ悅ビ合フ君臣ノ大義確固トシテ定マリ、然モ君モ臣モ一體トナツテ、共ニ憂ヘ共ニ樂シム。思フダニ胸躍ルデハナイカ。之皇國ノ理想ト共ニ、世界ノ理想デアリ、八紘一宇ノ精神デナクテ何デアラウ。之ガ爲ニコソ、我等ハ今マツロハヌ朝敵ヲ平ゲル爲ニ、堂々ト道義ノ軍ヲ進メテキルノデアル。四面皆敵、實ニ大楠公ガ千早ノ孤城ニ敢然トシテ義旗ヲ飜シタ委ソノママデアル。近キ日、賊軍ハ壞滅スルデアラウ。然シナガラ、敵艦隊擊滅ヲ以テ我事終ルトスルハ、大ナル謬リデアル。建武中興成ルモ、論功行賞ニ飽足ラザル不平ノ徒、卽チ官軍デアリナガラ終ニ眞ノ忠節ヲ解シナカツタモノニ依ツテ、再ビ中興ハ破レ、賊軍天下ニ滿チタ。大楠公ノ大楠公タル面目ハココニ始メテ眞ノ姿ヲ表ス。忠臣ト似而非忠臣トノ別ハココニ至ツテ明ラカニサレルノデアル。敵艦隊擊滅ノ後ニコソ眞ノ御奉公ヲ必要トスルノデアル。十年二十年ノ事デハナイ。我等ノ子孫ノ時代コソ、眞ニ忠烈ノ義士ヲ要スルノダ。正行ヲ作レ。我等ハ自ラガ忠烈ノ臣トナルト共ニ、次ノ時代ヲ受繼グベキ人々ニ、コノ精神ヲ遺ス重大ナ任務ヲ有スルノデアル。

歷史ノ懷古ハ、之ヲ貫ク忠孝ノ懷古デアル。楠公ヲ思フノハ、歷史中ノ偉人トシテ讃仰スルニ止ルノデハナク、楠公ノ精神ヲ今日ニ生カシ、明日ニ生カサン爲デアル。軍人勅諭ノ通釋ニ於テ、幾度カ歷史ヲ顧ミタノハ、勅諭其ノモノガ三千年ノ日本歷史ヲ背景トシテ造ラレタモノデアリ、コノ歷史ヲ基礎トシテ考ヘナカツタナラバ、日本ノ過去現在將來ヲ貫クベキ勅諭ノ眞ノ精神ヲ把握シ得ナイト信ジタカラデアル。

この文を讀む時、たゞちに想起せられるのは橋本景岳先生の『啓發錄』である。父子相承けて忠節を盡すことが、そのまゝわが國の道、皇國の學たり得るのであるが、この道は嚴然として皇軍將兵の中に生きてゐることを確信する。しかしてこの道を踐み行ふ修錬の道場こそ家である。

歐米風の學問と教育とによつて、わが國の傳統やこの傳統を體認せしめる道場ともいふべき家が危く喪はれようとしたが、滿洲事變、支那事變、大東亞戰爭によつて再び家の尊さが身にしみて自覺せられるにいたつた。殊に昨今の如く男は戰場や戰地に立働くことが多く、勞務問題、日用物資の配給制度等によつて、從來の如き生活態勢は不可能となり、事實大家族制に近い生活樣式

が復活し、或は留守宅の田舍への轉居が行はれ、實直にして素朴な田園生活の中に復歸することとなり、家の傳統が自然の中に身につくにいたつたことはまことに頼もしい限りである。また、歐米近代文明の所產ともいふべき輕薄なる豫防醫學や、榮養學を滿足せしむるに過ぎぬ舶來食料品の輸入杜絶によつて、數千年といふ體驗の上に生まれ出たわが國傳統の食事がこれまた止むを得ず復活し、强兵の素地が自然につくられつゝあることも見逃すことが出來ない。現在、表面の政治經濟現象にはじくざくな點がないではないが、大局的見地より見れば、國民は、傳統に生きる大道に歩み寄りつゝある。無意識に或は止むを得ず近づきつゝある時にあたつて、眞に傳統の意義を自覺し、この道に國民を導き、心身ともに健全な次代の國民をつくることこそ會澤正志齋先生のいはゆる「守禦」「長計」の策、戰力增强の策である。目下、戰力增强の狙ひどころとしては、戰鬪に勝つためには强力なる空軍、銃後の安定のためには食糧であり、この二つの生產力を十分に確保するために企業整備と食糧の緊急增產が叫ばれてゐる。軍事訓練をいよいよ盛大ならしめるとともに、家の傳統を自覺し、兩々相俟つて歐米流思想と生活とを拂拭することに力めなければ、完勝の條件を備へ得たとはいひ得ないのである。

三、青年指導の問題

戰爭の隘路は或は交通輸送問題といはれ、或は人の問題であるといはれてをるが、大東亞戰爭によつて青壯年の大部分が直接戰線に動員せられた結果、銃後の勞働を主として少年に依存することとなり、從來直接職場の體驗を持たない者達が農村を離れて工場に赴き、或は都會の商社や商店に店員として働いて居た少年達もまた徵用工として新しい生活環境の中に生活することとなつた。こゝに少年不良化が重大問題となり、隨所で所謂徵用工問題が論議の的となつてゐる。大東亞戰爭は、日本的世界建設の戰さであることは縷述を要しないところであり、その巨歩は着々と進められてはをるが、敵の勢力は數百年間に培養せられたものであり、その現有勢力も決して輕んずべき代物ではない故にわが國としては、絶えざる努力を以て戰力の增强、精神的戰力、人的戰力、物的戰力の增强に力めなければならない。然りとすれば、今後相當長期に亙るべき戰爭に完勝せんが爲には、今こそ眞劍に青少年問題を考慮しなければならぬ時期である。既製の思想から蟬脫し切れぬ成人、頭では判つても、仲々實踐に進み難いものに比較すると、青少年

達は遙かに柔軟な頭腦と身體とを具へてをる。今日の青少年は、明日の壯年、第二の國民といはんよりは、現在既に最大の戰力荷擔者なのである。先頃、さる會合の席で青少年の持續力は極めて短期であることを例證した人があつたが、これに對して、同席の他の人は次のやうに答へた。

「成程青少年は移り氣であるかも知れない。併しこの移り氣を上手に指導すると、素晴らしい力を生む。子供といふものは、單に移り氣なのではなく、新しいものに對する積極性が極めて逞しいので、與へられるものがその心を滿足せしめない場合には、所謂移り氣の如く見えるのだ。その證據に、現下の超重點的產業ともいふべき航空機製作や造船に從事する勞務者の過半數は青少年工であり、日進月歩の新鋭の設計に向かつて、壯年者は應接に苦しむやうであるが、青少年工は、これによつて却つて、常に新たなる興味と情熱とを喚起せられ、驚くべき性能を發揮してゐる。青少年工こそ今日の重工業の立役者なのだ。」と。この會話を耳にして、筆者は非常なる感激を覺えると共に、青少年問題の重要性を一段と強く感じさせられたのであつた。

青少年不良化に對する對策としては、既に二十年餘の歷史を有する少年保護制度が存するが、大正十一年四月十七日法律第四十二號を以て公布せられたる少年法に基づいて行はれて來た保護處分や刑事處分は、極秘裡に行はれるために、殆ど世人の耳目に觸れることがない。又從前は、今日程に青少年工の數が厖大でなかつた爲に、餘り世間に問題視せられなかつた關係もあり、司法關係者以外にはその實績を知るものは少なかつたといつてよからう。少年法第四十五條に「審判ハ之ヲ公行セス。但シ少年審判所ハ本人ノ親族、保護事業ニ從事スル者其ノ他相當ト認ムル者ニ在席ヲ許スコトヲ得。」とあり、名流名門の子弟にして司法保護によつて更生したるものの數は、相當多いにも拘らず、青少年の犯罪は闇の世界のことに終つてゐたやうに思はれる。

十八歲未滿で罪を犯したものは、少年審判所の調査、審判によつて、少年法第四條の規定に基づき、次の保護處分を受けることになつてゐる。

一　訓誡ヲ加フルコト
二　學校長ノ訓誡ニ委スルコト
三　書面ヲ以テ改心ノ誓約ヲ爲サシムルコト
四　條件ヲ附シテ保護者ニ引渡スコト
五　寺院、敎會、保護團體又ハ適當ナル者ニ委託スルコト
六　少年保護司ノ觀察ニ付スルコト
七　感化院ニ送致スルコト

八　矯正院ニ送致スルコト

九　病院ニ送致又ハ委託スルコト

その性狀と罪狀とに應じて、保護監督に差等を附し、少年保護司、囑託少年保護司、少年院その他保護團體の教職員が、保護、矯正、指導の任に當ることに定められてゐる。現在の矯正院は多摩少年院（大正十二年開設）浪速少年院（大正十二年開設）瀬戸少年院（昭和九年開設）福岡少年院（昭和十三年開設）鹿島少年院（昭和十六年開設）仙臺少年院（昭和十七年開設）北海少年院（昭和十七年開設）の七ヶ所である。近年に至るまでの矯正法は、軍隊的なる規律ある生活指導を中心として、學科は、少年の教育程度に應じて、讀方、算術、綴方、書方などを課し、又は中學校初年級程度の學科を教へることゝし、教科書には大體國定教科書を使用してゐた。作業は、勤勞の生活に慣れさせると共に、性格の陶冶に役立たせる方針を以て行はれ、少年の將來に於ける職業技術の訓練に重きを置くのが通常であつた。昭和十五年十二月末頃の四少年院の收容員數は四三七名、十五年中の退院者は一七九名、假退院者五五名で、一ヶ年間に矯正せられた數は、僅かに二百三十餘名に過ぎず、戰時下にあつて增加の傾向をたどる不良少年を矯正するといふ點では、無力であつたと評せざるを得ない。前記の如く鹿島、仙臺、札幌に三少年院を增設したが、是とても現下の要求を滿すに足らざることはいふ迄もない。

然るに、このやうな緊迫した事態に立到つたことは、矯正院の指導方法に再檢討を加へる好機會を與へ、戰時態勢に卽應する如き短期錬成を開始し、少年保護相談所や母の會による早期發見、早期保護の實施と相俟つて、從來の如き個人主義的矯正を拂拭することゝなつた。このやうな轉換に際し、當局者の間にはその成果について危惧の念が存したが、實施するに從つて、寧ろ意外の好成績を收め、啻に不良少年矯正の上に新機軸を作つたのみならず、副次的には青少年教育に關して種々の示唆を與へてゐる。

少年工の犯罪や不良行爲の激增した原因に關して、司法省保護局長森山武市郎博士は、「その一は少年に對する家庭教育が脆弱となつたこと。その二は少年の勞働力に對する異常の需要があり、しかもこれら少年工に對する指導監督が十分でないこと、その三は戰爭に伴ふ惡い影響が少年に反映すること。その四は國民學校または中學校の教育が低下すること。その五は警察力が不充分となること。」の五つを列擧してをられる。第三の戰爭に伴ふ惡影響とは、平和產業部面に於ける轉廢業問題、闇取引、不親切、殺人的雜踏に伴ふ道德的基準の低下等であり、遺傳、環境、訓練の三原因中、後の二者が最も大なる影響を及ぼすことが明らかにされてゐる。さすれば、不良化

の防止乃至矯正のためには、愛情豊かな落着きのある環境を作ると共に、皇國體の體認と皇民の責任觀とを徹底する訓練を強化するのが最も適切なる方法である。昨年來逐次實施し、本年一月二十日閣議決定を見たる『勤勞青少年補導緊急對策要綱』に基づいて行はれてゐる短期錬成は、右の如き要請に即應するものである。この要綱に則り、司法省並びに厚生省は『勤勞青少年補導緊急對策要綱に基づく實施要綱』を作成し、大日本産業報國會その他と協力して、一般勤勞青少年に對する補導機關の充實整備と、不良、虞犯、犯罪勤勞青少年に對する補導のための特別錬成の方法とを定め、別に勤勞青少年補導委員會、協議議會をも設置することゝしたのである。

かくの如くにして、個人主義的消極的なりし少年保護制度は、一朝にして國民主義精神に基づく積極的なる錬成に躍進し、今日迄の調査によれば、終了後の成績も從前に比して遙かに良好であり、大東亞戰爭といふ一大試煉は、この方面にも新局面を開き、戰爭の將來に輝しい光明を與へて居る。

「攻擊は最良の防禦なり」とは兵法の教へるところであるが、この鐵則は教育に關してもいひ得ることである。少年保護に於ける錬成の實情を視察した筆者の感想を簡略に述べよといはれゝば、右の言葉を以て答へ得るやうに思ふ。多摩少年院に宿泊し、院長、教官各位の御案内により具さに錬成の實況を視察する機會を得たから、簡單にその報告を兼ねて感想を述べよう。

見るものゝ胸に暗い心を植ゑつける少年院の名は、門標その他公式のところには殘存してゐるが、道しるべは既に「少年報國隊關東隊」と書き改められ、茲に既に新しい指導方針が端的に示されて居る。三萬餘坪の敷地には、あたかも今日あるを豫想したかの如く、宿舍、講堂、食堂、浴場等を含む建築物の他に、大運動場、農場、職員宿舍があり、師弟同行の錬成には恰好の環境が作られてゐる。日本の象徴たる富岳を仰ぎ乍ら錬成にいそしみ得ることも、少年達にとつては非常なる幸ひである。少年保護法公布以來二十年間少年審判所を始め保護機關に關係して來た愼重老練の名院長前田偉男氏の指揮する教官陣に接して、その風貌に明朗さを感ずる等も、嘗ての少年院を知るものには意外の感を抱かせる一事であらう。丁度修了生を送つた後のこととて、入所後一ヶ月たつたばかりの約八十名の院生しか殘つてゐないが、この八十名を中隊組織とし、中隊を三箇の隊に分け、中隊長には第一課長小根田奇夫氏が當り、小隊長には院生中の優秀者が任ぜられ、小隊員の統率の責任を一身に擔つて居る。各小隊毎に三名づゝ配屬せられた教官たちは中隊長を助け小隊長を指導しつつ錬成の實をあげる定めである。一日の食費十一錢といふ驚くべき

粗食をしてゐる――農場で生産せられる收穫物があるので、量の不足は更にないさうである――とも思はれぬ八十名は、都下の中等學校生等よりも却つてきびきびとした態度で、軍隊に準じた内務生活に服從してゐる。裸體での農事作業の賜物とでもいふか、眞黑い背中、逞しい筋骨を旭日に輝してゐる有樣は、世の錬成道場に見る禊行とは全く趣を異にする。成田山の刺青を腕に施してゐる一青年の姿さへ眼につかなければ、少年院の朝の行とは思へない活氣と生氣とに滿ちた光景であつた。この禊祓を行ふ前に、一時間半の朝の行がある。五時半起床するや、直ちに點呼を行ひたる後、宿舍内外の清掃に移り、洗面終了後、太鼓を合圖に半裸體に跣の輕裝で運動場に集合、ラッパの吹奏で職員もまた、小丘陵上にあるこの運動場に馳せ參ずる。院長、職員、院生一同の注目敬禮裏に、二名の當番院生は手際も鮮かに國旗掲揚を行ふ。そして全員が宮城遙拜をなし、院長の發聲によつて聖壽萬歳を唱へるのであるが、その聲は四圍の林に高らかに木靈するのであつた。

體操は海軍體操其の他適宜のものを實施するのであるが、のびやかな體操をするものはその顏からも、既に惡の影が去つた者であり、兇惡な過去の陰影を止めるものゝ手足は、未だぎごちなさを脱してゐない。心正しきもの、心素直なるものは、體つきや動作もこれを表はしてゐる。心身一如といふことがこの時位鮮明に感ぜられたことは筆者の生涯に未だ經驗せざるところであつた。朝禮が終ると先に記した禊祓と神拜、ついで朝食といふ順序だが、八時五分、午前の課業に先立つて五分間行ふことになつてゐる院長の訓示に際して、「諸君は明るい心持で、胸を張り、腕を高く振つて堂々と歩きなさい。そのやうな心懸けでゐると何時の間にか心が朗らかに、正しくなります。」といはれたのは、流石この道の達識者の訓示なりと肯いたことである。

午前の教程としては、月水金の三回、四十分づゝの皇民講話（院長、第一課長、第二課長擔當）のある他は、體錬、軍事教練、武道のみ、午後一時から五時までの四時間は、全靈を込めた農事作業――雨天の時は〇〇函の作成、終つて國旗降納、軍歌、號令調整、清掃、入浴等を教官の指揮に從つて行ひ、日中の作業を完了する。夕食が終ると、樂しい教養集會の時間が來る。寮舍指導、時事解說、紙芝居、吟道、講堂常會が、教官、助教と隔ない團欒の間に繰り展げられる。院長も隨時車座の一員となり、日中の嚴格な指導とは違つた和やかな集ひが、六時四十分から七時五十分迄續けられる。

八時から三十分間は、その日の日記を各自が記入するのであるが、愛情に飢ゑて居た院生の日記には、いぢらしい記事が餘りにも多い。職員の何心なく施した親切は身に泌みて感ぜられ、賞められでもすると、生まれてから賞められたことのなかつたものと見え、叱つてほしいなどと本

氣に書いてゐるのである。率直な日記の記述が、やがては明日の錬成目標を示し、職員達はこれによつて絶えざる反省をなすと共に、逞しい錬成道への氣力を培ふのである。「少年達は不良なのだ、自分達は指導者だ、矯正者だといふ心が少しでも教官の間にあると、院生達はこれを敏感に感じて反抗的になるものである。この心理を十分に心得るやうに。」とは院長が職員諸君に屢〻發する警告である。逃亡の看視に疲れた舊い少年院から、今日の少年院への飛躍はかうした點にも看取せられる。逃げようと思へば何でもない農事作業中に、默々として除草する一人の教官に從つて、逃亡を忘れた院生もまた默々と作業を續けてゐる。六月一日から、今までは逃亡防止のために、外部から堅く閉した宿舍の鍵は撤去され、普通の民家の如く、內部から院生の手で鍵がかけられ、窓の鐵格子も次から次へと撤去せられてゐる。「攻擊は最大の防禦なり。」いみじくも、この言葉は、少年保護を目的とするこの特別錬成によつて實證せられてゐるではないか。

就床準備が終つてから就床前の點呼までの間の二十分間、小隊長の指導の下に、全院生は、寮舍の廊下に端坐合掌して身動き一つしない。過去の生活、今日一日の生活を反省し、明日の明るい生活への祈念を捧げる他、餘念ない神々しい姿だ。このやうな日課を繼續する二ヶ月の錬成は、全く「攻擊は最良の防禦なり。」といふ兵法の極意から出てゐる。その間感情の波が寄せては返すやうであるが、その度毎に皇國の傳統に生きる心構へと、大東亞共榮圈建設に對する皇國民の使命觀とが强められて行くのである。多摩少年院の錬成の仕方とほゞ同樣の方法が、他の六箇所の少年院、產業靑少年特別道場（第一道場共善會、第二道場阿陽學舍、第三道場至誠院）興亞錬成道場（誠明學園）興亞學生錬成道場（立正園）工場附設少年保護團體所屬の各道場（三保松原寮、忠誠寮、紅和寮、孝子寮、神東寮、名古屋造船報國寮、金山寮、淸明寮、函館和光學園）等でも實施せられてゐる。本年度には總數三十箇所、來年度には五十箇所に達する計畫であると聞いてゐる。豫定通りに運ぶとすれば、年年少くとも三萬人の少年が更生して世に送られ、得意の職場たる航空機工場、造船所に就業することとなる。實に、短期錬成開始以前の百倍の能率を上げる譯である。古來「惡に强きものは、善にも亦强し。」といはれて居る如く、過去の不良少年の中から錬成の効も著しく模範工が輩出する現況である。

以上述べた如く、少年保護制度の運用は劃期的なる躍進を遂げ、少年達が閑居して不善をなす如き環境を一掃し、寸暇なく勤勞に從事しつつ、自然の中に正道のみ步む習慣を體認せしめることに成功したのである。所謂學科に類するものは僅かに時事解說と吟道あるのみ、あとは總べて流汗を通ずる錬成としたのが特別錬成の要點である。あれもこれもと、不徹底な授業に終つてゐ

る學校教育内容が、却つて少年院の短期錬成の成果によつて批判せられて居ることに留意しなければならない。筆者は、皇國の學は單なる古典の註釋や日本的思惟形式の論議に終つてはならぬと考へてゐたが、今度の少年院視察は日頃の考を更に確信にまで高めて呉れたやうな氣がする。正しい國體觀は必ず雄渾なる世界經綸を生み、正しい世界經綸は透徹せる國體觀に基礎を持つものである。偶々少年院に於て吟道が正しい國體觀念を端的に把握する道となり、時事解説が世界經綸の實行者、荷擔者たるべき責任觀の養成に甚大なる功を奏してゐることを知つた。豊かな聲量と雄勁なる節まはしで先哲偉人の作つた詩の暗誦が指導せられ、院生達は、既に自分の知つてゐる詩の解説を通じて、作者の經歴や精神、即ち古今に通ずる皇國の傳統を體認するのである。「皇國の傳統」と「世界の大勢」とは、高等學校新教授要綱による理科、人文科の内容である。この二項目を體得し、これを實踐する氣魄と力とが養はれたならば、皇國の學問をしたことになる。少年院が大東亞戰爭下の苦難の道を踏み分けて、この道理を見出し、この道理を教育の上に實施することによつて、過去二十年間解決し得なかつた惱みを一擧に解決し得てゐることは尊い教訓といはねばならない。少年保護制度活用の上の飛躍的進歩を感謝するにつけても、學校教育の新展開を望む心は愈々切なるものがある。

教育制度並びに教育内容の刷新に就いては他の機會に論じたところであるが、（拙著『傳統に生きる』參照）大東亞戰爭の必要に即應して、陸海軍の經營にかゝる高等、專門學校、即ち徹底した精神教育を基礎とした技術教育機關は續々と增設せられ、今や文部省管下の學校の收容人員を遙かに凌駕しつつある。こゝに將來のわが國教育の方向が既に具體的に示されてをることを思はざるを得ない。

内地の教育は舊來の慣習によつて支配され、不良學校の一部を打破する以上の革新は容易に行れ難いやうに思はれるが、今や大東亞各地に於て、現地人を相手の各種の教育の實驗をなし得る好機會に惠まれて居るのである。筆者は、今後の教育は、嘗て武士達が元服を境として一個の成人となつた實例に徴しても、十五、六歳を以て一應完了せしむべきものであると考へてをる。學校教育は、皇國の傳統並びに世界の大勢を明確に體認せしめる精神教育を基礎とし、陸海軍に見る如き日常の生活指導と軍事訓練を行ふほかに、學校附設の工場に於て實習作業をなし、皇國臣民としての深い徹底した信念を持つ技術者を養成することを以て、國民教育となすべきものであると考へる。又このやうな簡素にしてしかも强力な指導を共榮圈各地の現地人に施行し、その中の優秀なるものは特定の内地工場に送つて、懇切且つ嚴格なる修錬をなし、歸郷後は現地の生產

指導に從事せしめ、現地の工業並びに農業を育成强化する中核たらしむやう配意することが必要であらう。

既に述べたやうに、共榮圈建設の爲には最小限の食糧自給體制を確立すると共に、大東亞共榮圈全般に亙る國土計畫を樹立しなくてはならぬが、それが爲には、現地に夫々包藏される資源に即應した工業を開發しなければならない。併しながら、工場設置の資材は容易に得らるべくもないから、取敢へず修理工場を主體とする工場建設、又は修理工場を實習場とする工業學校を建設し、技術的な基礎の確立に應じて逐次工場建設と資源開發、並びにその資源による製造工業の實施へと向かはしめる必要がある。されば、內地に於ける優秀なる勞務者を技術指導者として共榮圈各地に派出し、彼等に指導者としての責任を持たしめる考慮をなさなければならない。文部省の後援にかゝる中央高等勤勞學校の施設の如きは、かくの如き共榮圈建設の技術的指導者簡拔の爲に大いに活用せらるべきである。又、目下種々の批難を蒙つて居る徵用工の問題等も、かうした大東亞共榮圈確立の爲の技術者が大量に要求せられつつある現狀を考慮すれば、これに對する處置もまた自ら明らかになるであらう。

先に、言語を異にする異民族に對して日本の傳統的精神を理解せしめるには、行爲を措いて外になきことを述べたが、このやうな具體的な建設こそが、皇國の精神を彼等に體認せしめる眞の文化工作であり、これをなし得る如き人材の養成こそが文化工作の基礎をなすものである。大東亞戰爭の今日の問題の解決が、かかつて青少年の双肩にあるはいふまでもなく、さらに共榮圈の將來に對して、その成否を決するものもまた、青少年を措いて外にないことを思ふとき、右に述べた不良少年の問題の如き暗黑面にすら打開の道が開かれつつあるのはよろこばしき限りである。況んや純眞にしてしかも皇國に殉ずる熱意を損はれざる一般青少年の場合に於ては、壯年者が理解し得なかつた新しい心境の開かれて居ることを着眼しなければならない。

これと關聯して留學生の問題も熟考を要する。從來留學生の大部分は、滿洲、支那、蒙疆の學生であつたが、之らに對して滿洲は巨大な留日學生會館を持ち、蒙古の學生に對しては善隣協會がその輔導施設を講じたのに對し、最も重要なるべき中國留學生に對して適當の施設がなく、唯に日本語の指導に對する貧弱なる施設があるに過ぎなかつた。彼等の日常生活指導に適切なる宿舍等もなく、放任に近い狀況が支那事變後數年に亙つて改められず、爲に種々なる不祥事を招いてをつた。滿洲國留日學生會館の如きも、彼等の日常生活指導が不徹底の爲、香しからぬ事件を

續發してをつた。善隣協會に於ては、愛情に滿ちた嚴正なる一ヶ年の指導をなし、日本語の修得に資してゐた點は大いに嘉すべきであつた。然るに一年の期間を終へて各自が思ひ〳〵の大學、專門學校に入學するに及んで、自分達が今まで善隣協會で受けて居つた教育と餘りにも違つた學園風景に接し、却つて良き指導が逆の効果を生み、日本人に對する不信の念を起さしめてゐると聞いてゐる。殊に、大學、專門學校の教育に際して、歐米の學問が餘りにも多きに過ぎ、折角修得した日本語のみにては學習することが出來ず、さらに英語なり獨逸語なりを重ねて修得しなければならぬことは、彼等に對して、日本の學問は歐米の學問であるとの印象を强く與へるやうである。かかる事實が、支那事變以前に於ては支那の學生の留學地を或はアメリカ或は歐洲に求めしめる結果を招來した理由であることは明らかである。彼等の中日本に留學を志す者は、日本の生活が經濟的に安直であるといふ理由に出づることが多く、日本に於て眞に精神教育を受け、或は眞に高い學術を修得しようといふ希望の下に行はれたのでは斷じてなかつたのである。このやうな缺陷は、留日學生の歸國後の狀況に於て遺憾なく暴露して居る。即ち彼等は實力に於て歐米留學生に劣る者が多く、或る者は日本の弱點を歸國後宣傳し、支那事變後に於ても、留日學生にして優秀なる者は日本に反感を抱いて敵地區に潛入した例が決して少くない。この悲しむべき實情を眺める時、わが國内の學制の刷新並びに學問内容の刷新を實現することこそ喫緊の問題であり、更には學生の指導に一段の工夫を要請せざるを得ないのである。

本年九月十日、日學生の輔導對策が發表せられ、滿洲、支那、蒙疆をはじめ泰、ビルマ、比島等大東亞各地よりの留學生二千七百名に對する處遇が次のやうに決定せられた。その實施要領は、

一、留日學生の選拔、内地輔導團體の指導監督並びに卒業後の指導等は大東亞省に於て、又教育部面は文部省に於て擔當し、兩省間に必要なる機構を整備する。

一、留日學生は、當該國政府又は現地機關の推薦により優秀な人材を簡拔するが、その數は大東亞、文部兩省に於て關係各廳と協議し、計畫的に各國各地域別に決定する。

一、留日學生は目的の學校に入學する以前に派遣國及び派遣地域または内地において文部、大東亞兩省協力の下に豫備教育を施し、訓育に重點を置き日本語の習熟、基礎學力の向上を圖る。

一、入學せしむべき學校の選定は各國各地域別の事情並びに派遣國及び本人の志望等を勘案し文部省で計畫的に配分する。

一、留日學生に對しては原則として日本人と同樣に嚴正に教育し、特別學級等の特殊な取扱ひ

をせず、努めて寄宿舍等による合宿生活によつてわが國學徒との精神的一體化を圖ると共に指導教授を任命、完璧を期する。

一、留日學生の輔導に關しては特に輔導團體の活動により徹底を圖る。

一、留日學生に對しては卒業後においても留日の成果を發揮せしむるために就職その他の適切な措置を講ずる。

一、國內各層に對しても、留日學生に對する理解を深め指導に協力せしむるやう各般の措置を講ずる。

一、文部、大東亞兩省に留日學生の指導に必要な機構を確立する。

一、輔導團體の指導監督は各國各地域別に一元的に統制指導する。

と見えて居り、大體の方針が定められてをるが、要はこの實施要領を如何に具體化するかといふ問題であり、中でもこれを擔當する軍官民の「人」の問題が熟慮されねばならぬ。筆者は、大規模なる留學生專門の教育施設を風光明媚なる地域に設立し、先に現地に於ける指導の要領に就いて述べた如き施設を內地に於ても實施し、徒らに既成の國內の大學、專門學校の惡風に染まざるやう特別の配慮をなす必要があり、國內の學校制度並びに教育內容の刷新に應じてこれらに適宜就學せしめることが本道であると思ふ。

このやうに留日學生の輔導問題を考へても、思想刷新、學制改革の要は根本的であると同時に、急速に實現せらるべき必要を痛感する。軍の教育が特殊であり、文部省管下の教育が基礎的教育であるといふ觀念は未だ拂拭せられないでをるが、皇國に於ける武士教育或は科學技術教育の傳統は却つて軍の教育の中に展開してをることを知らねばならぬ。『教育ニ關スル勅語』に於て「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」と仰せられてをるが、今こそ史上嘗てなき緩急の秋であつて、國民は世界維新の戰時態勢に隨順しつつ皇國民としての一般的教養を修得しなければならない。即ち、軍人に賜はりたる勅語の精神に基づく軍事教育こそが、『教育ニ關スル勅語』の趣旨を今日に奉戴する所以であると信ずる。文武兩教育の間に寸隙があつても、この皇戰を完遂することは到底不可能である點に思ひを致し、當局者は一段の反省をなす必要があるのではなからうか。

四、現代青年の覺悟

歷史を學ぶ一學徒として十數年來明治維新前後のことを檢べてゐる私にとつて、數年以前まで

一番不可解だつたことは、維新前後に活躍した志士達の年齢があまりにも、若か過ぎることである。私ばかりでなく、我々の育つて來た周圍の人達と維新の志士達の同じ年頃とを較べると、丸でお話にならない程、維新前後の人達が大人びた意見を述べ、行ひをしてゐるのである。大人びるといふと語弊があるならば、しつかりしてゐるといつてもよい。兎も角、比較を絶してゐるのである。いま二、三の人について、徴兵適齢期までにやつたことを回顧するに、防長精神の根本を培つた吉田松陰先生は、年少にして『武教全書』を藩主の前で屢〻講義し、十七歳には、山田亦介から長澤流兵學の免許を受けてゐる。十九歳には明倫館卽ち藩の學校を再興する意見書を上り、二十歳のときには兵學寮掟書及び門弟等級之次第を定めたり、水陸戰略の著述をなしたり、防長兩國の海岸を藩の命令で巡視したり、立派に一人前の働きをしてゐる。二十一歳には、九州に旅行し、平戸には五十餘日も滯在し、山鹿素行の後である山鹿萬介の家塾で、多くの書物を讀み、或は各地の志士を歴訪して國事を談じて歸つてゐる。當時の日記を繙くと、その識見と信念とは十以上も年かさである我々の遠く及ばないものである。

橋本左内先生は、さきにも述べたやうに十五歳にして『啓發錄』を著はし、侍たるべきものは「稚心」を去り、「負ケヌ氣」を振ひ起し、志を忠孝に立て、學に勉め、「交友ヲ擇ブ」べきことを說いてゐる。田中光顯伯を通じて、左内先生自筆の『啓發錄』は朝廷に獻上せられ、今では御物となつて居るやうに承つてをるが、十五歳にしてかやうな達見を堂々と述べるなどといふことは數年前までの私には到底信じられなかつたことである。十九歳の折父が歿したので、直ちに家督を相續し、藩醫に列せられ、翌年には當時未だ普及してゐなかつた種痘に出精して藩主より慰勞の辭を賜はり、二十一歳に到り江戸に遊學し、二十六歳で刑死までの六年間は專ら國事に奔走し、藤田東湖先生、西郷南洲、春日潛菴、梁川星巖等知名の志士と屢〻往來してゐる。先生が江戸に遊學中姉の緣談に意見を求められ、その返書の中に、

如何程餘事は佳候ても、婿之人品無道不埒之義有之候ては、一生安心と申場合に運び難く申候間、此處尙更御心付厚奉願上候。此一條も先可なりと申體に御座候はば、吳々小生異存無之候。一日も早く御談御取掛奉願候。

と二十一歳の若者と思へぬしつかりした意見を述べてゐるが、同じ年、弟繩三郎に宛てた書狀の中に、

一、去る六日元服之由、目出度奉存候。已後は益御身の行肅整に相成候樣祈居候。十五以上は大人之數に加り候事故、一般氣象御立替へ可被成候。

一、論語通鑑輪講有之候由、何分折角御研究可被成候。經史共に有用之書に候得ば、徹底御習熟可被成候。

と訓戒し、十五歳以上は大人の數に加はることといふ當時の常識を書いてゐる。これをみるに先の『啓發錄』が十五歳の時に著はされたのは故なきことではない。先づ「稚心」を去るの要を說かれたのは右の手紙に書かれたやうな意味であつた。これにより、大正、昭和時代に比し、十年も早く成人するのが當時のならはしであつたことを知ることが出來よう。

東行高杉晉作先生は二十九歳で歿してゐるが、十九歳の時松下村塾に入り、二十歳の時江戸に遊學し、二十一歳には既に歸國して、そろそろ經綸を示し始めてゐる。松陰先生の義弟に當る久坂玄瑞が、同志高島忠三郎等と共に鷹司關白邸で割腹したのが二十六歳、坂本龍馬が慶應三年十一月十五日夜、幕府の見廻組々頭佐々木唯三郎に襲擊せられ、同志中岡愼太郎と共に鬪死したのが三十三歳とすれば、この人々が大きい仕事をやつてゐるのは何れも二十代であつた。中岡、坂本と共に海南の三傑、卽ち土佐に於ける勤皇の人傑は瑞山武市半平太先生だが、この人も死を賜はつたのが三十七歳である。

又近くは、興亞の先覺者を漢口の樂善堂で養成せられた荒尾精先生が、日淸戰爭の直後、臺灣で病死せられたのも三十八歳、志を立て日支提携して歐米勢力をアジアより驅逐し、アジア人のアジアたらしめるために樂善堂を作られたのは二十九歳の年である。先生に從ひ、日淸戰爭當時特別工作隊員として活動した人材も、これ亦何れも皆二十歳前後の青年であつた。

もろともにあすの生命もはからねばけふを限りの別とやせん

と云ふ恩師荒尾東方齋先生の歌を心にとめて崑崙のかなたに旅立ち、遂に文字通り不歸の客となつた浦敬一は、當時二十九歳、浦の第一回の企に途中まで同行した河原と北御門は二十七歳と二十五歳であつた。明治維新に限らず、歷史を推進し、國體護持に挺身するものが常に青年であることは、古今東西その揆を一にしてゐる。大化改新當時の中大兄皇子と藤原鎌足、元寇當時の北條時宗、建武中興と小楠公、數へ立てればその例は限りがないが、今更らしく、このやうなことをいふのは先に述べたやうに、私や我々の周圍の人とあまりにもかけ離れた心境をこの人達がもつてゐることを感ぜざるを得なかつたからである。しかもこのことがはつきり判らなければ歷史、特に皇國史が眞實にわかつたとはいへない。卽ち、私の專門に學んでゐる歷史についての惱みが解決せられないのである。

ところが近年に到つて、殊にこの二、三年來始めて維新の志士のみならず、歷史を推進し皇國

體を護持した青年の心境がはつきりと判るやうになつた。即ち歴史の謎がとけるやうな氣がするのである。陸海軍の若人、田舍の青少年達に接する時、此處彼處に松陰先生や景岳先生や龍馬先生や半平太先生と同じ年頃で、同じ心境でゐる人達があることが判つた。維新の志士、興亞の先覺者があのやうな心構へで皇國の道の實現のために欣然として命をさゝげたことが事實であつたといふ確信をもつことが出來るやうになつたのである。

わが國の學問、わが國の思想は、文字や言語で表はすだけでなく、行を以てあらはすものであるといふ漠然たる考が、現在の若人の行爲によつて、愈ゝ明瞭になつて來た。皇國の學問とは、天皇陛下の大御心と御經綸とを奉戴し道の實現の爲に死んで行つた聖賢、先哲偉人の忠烈を眞似て默々として行ずることであると考へる。大御心を御製に仰ぎ、御經綸を御詔勅に拜しつゝ、命をかけて先輩の美しい行爲を眞似ることがやがて學問である。橋本左内先生は、『啓發錄』で、

學とはならふと申す事にて、總てよき人すぐれたる人の善き行ひ、善き事業を迹付して習ひ參るを云。故に忠義孝行の事を見ては直ちに其人の忠義孝行の所爲を慕ひ傚ひ、吾も其人の忠義孝行を負けず劣らず勉め行き候事、學の第一義なり。然るに後世に至り、字義を誤り、詩文や讀書を學問と心得候は、可笑しき事ども なり。詩文や讀書は、右學問の具と申す者にて、刀の欄鞘を刀と心得、階梯を二階と存候と同じ淺歯粗麤の至りに候。

と說いてゐる。皇國の學問の第一義は右の通りで、詩文や讀書はもとより學の本義に徹する手段、即ち「具」としては大切であるが、學問の第一義ではない。然るに久しい間我々は詩文や讀書或は所謂研究作業を學問と信じ、それに沒頭すれば學問をしてゐるものと思ひ込み、わが國の傳統的な學問の精神を喪つてゐたのである。そこで維新の志士の如き心境が果してあり得たかどうか、一應疑念をさしはさまざるを得なかつたのである。

神州不滅の信念、これは日本人の死生觀の根本をなすものであるが、近頃の青年達の行爲や思想に接するにつれ、遲蒔ながら我々まで、この信念を抱き得るやうになつて來た。空を制するものはやがて最後の勝利者である。このやうな考へ方で昨今青年達を空へ空へと送り出してゐる。所謂インテリ出身の將校も實戰の體驗を通じ、よく維新の志士に近い心構へをもち得るものだといふことを高戸顯隆主計中尉は其の著『學徒出陣』の中で次の如く述べてゐる。

もう夜明けがすぐそこに迫つてゐるのだ。夜が明ければ忽ち敵機がやつて來るに違ひない。私は眞面目になつて考へた。たとひいまこんなに助け上げようとも、夜が明けて敵機に爆擊されゝば沈んでしまふかもしれぬ。それよりも、十人でも百人でも助け上げて一刻も早

くことを退避すれば、それだけ人命も助かるし艦の保全にもよい。小乘の蟲を殺して大乘の蟲に生きる方がほんとうではないだらうか……。しかし艦長は信念の人であつた。われ〳〵のやうに二に三を加へて五になるといふ理窟の人ではないのだ。兵隊は、皆最後まで助けられた。

私はあとでしみ〴〵思ふのであつた。いまこそわれ〳〵のものの觀方の地盤、ものの考へ方の地盤が變革されねばならないのだと。二に三を足して五になる考へ方では、到底この戰爭を遂行することは出來ない。論理を超えたもの、哲學を超えたもの、信念であり、悟りでなければならない。戰ひはそれによつてのみ超えられるのだ。私は過去におけるものの觀方の地盤、考へ方の地盤が、いまこそ心よい音を立てながら崩壞して行くのを知つた。

神州不滅。わが國の傳統的精神はこのやうにして、今青年達の心に蘇つて來てゐるのである。夜明けだ。日本精神の夜明けだ。既に成人した人々はこの現實を直視しなければならないと近頃このことのみを思ふ。

このやうな考に移つて行く經過は『學徒出陣』に細々と記されてゐるが、任務を果し、歸つて來た海の荒鷲の平然たる態度などは恐らく非常なる感銘を與へたもののやうである。

高戸中尉はこのやうな情景は始めは「不思議でならなかつた」といつてゐる。而も戰も度を重ねる間に不思議でないのみか、却つて今迄の學生々活が異樣に映じて來るのである。既に實戰に參加する前、許されて外出した時の思出をつぎのやうに記してゐる。

大學生が澤山通るのを見た。彼等はポケットに兩手を突つ込み、煙草を吹かしながら歩いてゐる。その姿が何故か非常に貧弱に見えて來た。私は、あれが過去の自分の姿だつたのだと思つた。あれ程内容をと求めてゐたその姿が、ただ道化者のやうにしか見えないのは何故であらうか。

と學校制度、學校教育を反省せしめられてゐる。「學徒戰時動員」の意義は、一般の教育と軍隊教育とのかかる大きな溝をなくする上に大きな價値が存する。敵國アメリカの學徒動員の事實が新聞などで書き立てられ、日本も負けぬやうにと謂はゞ遲れ馳せのやうな指導も見られる。しかし、學徒動員は政府としては早くから考へて來たことで、早くは滿洲、支那の勤勞報國隊、それについては高等學校、大學、專門學校現地移駐案等も愼重に且つ眞劍に論議せられたのである。英米流の平和時の學校教育を、本格的な平戰兩樣の構へをもつ教育に如何にして切り替へるかは、久しく當局が考へたところであつて、決して一時の便宜に出たものではない。戰時下の青少年の

心構へは決して突如として生まれたのではなく、わが國本然の傳統的なる學問の復活、精神の復興なのである。大東亞戰爭といふ未曾有の決戰下に相應しく、吉田松陰、橋本左内、坂本龍馬等維新の志士、荒尾精、浦敬一、山崎羔三郎、鐘崎三郎、藤崎秀等所謂支那建設の先覺者が無數に、一時に出現したのだと考へるのである。死に就くこと歸するが如き死生觀に徹し、人生二十五年、人生三十年、父祖の、兄弟の、或は先輩の名を汚さぬ立派な最期を遂げようとの一念にかられ、二六時中修養を續げてゐる陸海空のつはものが幾萬人となくある。更に將來陸海空に志を伸さんとする青少年學徒の數に至つては實に數限りがないのである。學習院の公達も若い國民學校の先生も敢然これに加つてゐることは周知のことである。決戰下いつの間にか、橋本左内先生が令弟に訓へた「十五歳以上は大人の數に入り」、稚心を去り、負けぬ氣を振ひ、志を忠孝に立てたものが現に無數に存在するのである。胎内にゐる期間の長い動物は高等であり、學生々活の長い國民ほど高等であるといふやうな所謂知識偏重の學校教育を中心とする時代は既に過去の夢となつてゐるが、自由主義華やかな時代に育つた私共には仲々この現實が判らなかつたのである。青少年を戰場へ送るのが痛々しいことのやうに考へられたり、軍隊生活が辛らからうと同情したくなることは、今日では非常なる錯誤である。武士の子に武藝の修養を止めさせるに等しいことである。

君がため命死ぬべきまますらをとなりてぞ生ける驗ありける

と詠んだ勤皇詩人佐久良東雄先生と心境を等しうするのが、現代の青少年のいつはらぬ心であることを、成人たる父も母も認識せねばならぬ。全國の父母が、そして青年を指導する者がこの事實を見つめて青年の裡に燃え上る情熱と力とに正しき指向を與へるならばアジアの夜明けが必ず訪れてくる。明るい淨らかな戰場、學びの庭、工場、そして力强い戰爭即ち建設の逞しい進軍が、嘗て熱砂のインドにあつて祖國を顧みつゝ「アジアは一なり」との確信を述べた岡倉天心の理想を實現する。東方齋荒尾精先生が三十八歳を一期として臺灣に客死する時、惡熱と混沌の中に、いまはの言葉として殘した「ああ東洋が、東洋が」の一句が必ずや輝しい光によつて迎へられるであらう。青少年の間には澎湃として「み國」の傳統的精神が蘇つて來てゐるのである。この現實を十分に認識し、父母たるもの、兄姉たるもの、乃至は上司たるものも亦進んで日本の傳統の體認に及ばず乍ら懸命の努力を拂ひ、燃え上る青年達の赤熱の血潮を冷却せしめないやうにすべきである。學徒にのみ『學徒戰時動員要綱』に見える「有事卽應の態勢」「盡忠の至誠」「戰力增强」の心强」を强ひるべきではない。青年達の心に鬱勃たる「有事卽應」「盡忠の至誠」「戰力增强」の心

構へを濶達に伸べ行く道を開かねばならぬ。『學徒戰時動員要綱』は既に閣議を經て公布せられ、夏期錬鍛を魁として實踐に移されてゐる。わが國の傳統をよく體認し、アメリカ流の流れ作業そのままの大工場主義や、それを聯想せしめる大定員主義の教育體制に檢討と反省とを加へ、家の傳統に即應する、小規模工業の編成、中小工場の活用、少定員制教育の復活、或は徵用工員に對しては將來外地の技術指導員たるべき任務を與へ、輝しい將來の希望を與へ、その重責を全うせしむるやう慈愛深い、而も峻嚴なる錬成を加へる等の新しい工夫を着々と實現し、青少年達に常に明るい希望と大いなる夢とを持たしめ、「盡忠の至誠」がどこまでも伸びて行くやうな道を拓くべきではないだらうか。青少年時代に抱いてゐる「み國」の傳統に生きんとする尊い血潮が、時と共に冷え去るやうでは、大東亞共榮圈の將來には一抹の不安なきを得ない。青少年と共に、成人も、大人も、兩親も、兄姉も、上司もこぞつて皇國史にたたへられてゐる傳統を體認して、文字通り一億一心少しの隙もなく、不滿もない世の中を築かうではないか。

興亞論

出版會承認い三三〇二五四號

昭和十九年四月十日印刷
昭和十九年四月二十日發行（五、〇〇〇部）

定價參圓
特別行爲稅相當額貳拾錢
合計金參圓貳拾錢

著者　吉田三郎
發行者　東京都牛込區横寺町五五　赤尾好夫
印刷者　東京都小石川區大塚町廿五　井上龍郎
印刷所　東京都小石川區大塚町廿五　日新印刷株式會社
製本所　東京都神田區三崎町一ノ六ノ二　旺文社製本部堀田製本所
發行發賣所　東京都牛込區横寺町五五　旺文社　振替東京五七番

日本標準規格A列五號　日本出版配給株式會社

著者略歷

明治四十一年京都府に生まる。京都帝大史學科卒。國民精神文化研究所研究員、興亞錬成所錬成官を經て現に興南錬成院錬成官たり。

日本思想戰大系

大東亜戰爭は米英思想を殲滅すべきわが皇道主義の果敢なる思想の戰である。從つて思想戰體制の强化こそは現下最大の急務である。日本思想戰大系はこの原則確認の上に企劃された。即ち本大系は苛烈なる戰局下皇國々體を顯揚し神州不滅の信念を鼓吹し、光榮ある捷利への大道を開拓せんとするものである。

日本教育革新宣言・杉山謙治
米英思想批判・淺野晃
現代思想戰史論・野村重臣
日本藝術論・金原省吾
日本經濟頌・西谷彌兵衛

出版會推薦 戰時重點版
戰時生產論・松前重義
日本政治・花見達二

近刊
日本人物論・滿田巖
世界新秩序建設と地政學・小牧實繁
ユダヤ論攷・井澤弘

◇以下順次刊行・A五判・平均三百頁各册定價參圓(税別)・送料三十錢◇

旺文社
東京都牛込區横寺町五
振替東京五七番

947
5

終